

ALPS ブックレット シリーズ ▶▶▶ vol.4

# 米国高等教育における アカデミック・アドバイジング

—アカデミック・アドバイザー養成と専門職団体 (NACADA) の役割—



アカデミック・リンク 教育・学修支援専門職養成プログラム  
ACADEMIC LINK PROFESSIONAL STAFF DEVELOPMENT PROGRAM for EDUCATIONAL and LEARNING SUPPORT

千葉大学アカデミック・リンク・センター

教育関係共同利用拠点

(教育・学修支援専門職を養成する実践的SDプログラムの開発・運営拠点)



ALPSプログラム 第4回シンポジウム

# 米国高等教育における アカデミック・アドバイジング

—アカデミック・アドバイザー養成と専門職団体(NACADA)の役割—

千葉大学アカデミック・リンク・センター

教育関係共同利用拠点

(教育・学修支援専門職を養成する実践的SDプログラムの開発・運営拠点)



## はじめに

---

千葉大学アカデミック・リンク・センターは、平成23年度の設置以来の活動をもとに教育・学修支援の専門性を備えた人材の養成に取り組むこととし、平成27年7月に教育関係共同利用拠点（教職員の組織的な研修等の共同利用拠点《教育・学修支援専門職養成》）として文部科学大臣より認定されました。平成28年7月に再認定を受け、平成29年4月から平成34年3月まで「教育・学修支援専門職を養成する実践的SDプログラムの開発・運営拠点」としてその活動を継続することとなりました。その目的を達成するために“アカデミック・リンク教育・学修支援専門職養成プログラム（ALPSプログラム）”を展開しています。

今回のシンポジウムではアカデミック・アドバイジングをテーマとして取り上げました。アカデミック・アドバイジングはALPS履修証明プログラムの中でも基盤的テーマの一つとして取り上げているものですが、我が国の高等教育機関ではまだ十分に展開されているとは言い難い領域の一つです。このような背景を踏まえ、アカデミック・アドバイジングがすでに専門領域として確立している北米から、専門職団体NACADAの専務理事であるチャーリー・ナット先生をお招きして、アカデミック・アドバイジングを支える理論的枠組とその実践についてお話を伺いました。講演後の質疑でも活発な意見交換がなされ、アカデミック・アドバイジングとは何かということについて具体的なイメージを共有することができました。また当センターの我妻鉄也よりALPSプログラムの概要と進捗についても報告いたしました。

ここにその成果をブックレットとして刊行することで、当日ご参加いただけなかった方々の参考になれば幸いです。本拠点の活動に引き続き皆さま方のご支援を賜りますようよろしくお願いいたします。

平成31年2月

千葉大学アカデミック・リンク・センター長  
竹内 比呂也

# 目 次

はじめに

目次

プログラム

挨拶・趣旨説明 ..... 7

千葉大学副学長、附属図書館長、アカデミック・リンク・センター長、人文科学研究院教授

竹内 比呂也

## 第1部：報告

千葉大学における教育・学修支援専門職養成プログラム

(ALPSプログラム) について ..... 10

千葉大学アカデミック・リンク・センター特任助教 我妻 鉄也

1. 「教育・学修支援専門職」育成の必要性 ..... 10

2. 千葉大学アカデミック・リンク・センターにおける  
「教育・学修支援専門職」養成の取組 ..... 11

3. ALPS履修証明プログラムについて ..... 14

4. 今後の展開 ..... 15

5. スライド資料① ..... 17

## 第2部：講演

「米国におけるアカデミック・アドバイジングの理論と実践：NACADAの役割」

[Theory and Practice in Academic Advising in the United States:  
Role of NACADA] ..... 32

NACADA (National Academic Advising Association) 専務理事

チャーリー・ナット氏 (Dr.Charie Nutt)

1. 学生の成功のために ..... 33

2. アカデミック・アドバイジングとは ..... 37

3. アカデミック・アドバイザーとして学生に教えるべきこと ..... 39

4. 大学におけるアカデミック・アドバイザーの在り方 .....	43
5. おわりに .....	47
6. 質疑応答 .....	49
7. スライド資料② .....	54

## 参考資料

講演内容：英文 .....	64
---------------	----

千葉大学ALPSプログラム 第4回シンポジウム

## 米国高等教育における アカデミック・アドバイジング

ーアカデミック・アドバイザー養成と専門職団体  
(NACADA) の役割ー

日時：2018年11月13日（火）14：00～16：50

会場：千葉大学アカデミック・リンク・センター I棟1階コンテンツスタジオ

### プログラム

司会：竹内 比呂也（アカデミック・リンク・センター長）

14：00 挨拶・趣旨説明

14：05 ALPSプログラム報告

我妻 鉄也（千葉大学アカデミック・リンク・センター特任助教）

14：25 講演

チャーリー・ナット氏 Dr.Charlie Nutt

(NACADA (National Academic Advising Association) 専務理事)

16：25 質疑応答

16：50 閉会



## 挨拶・趣旨説明

千葉大学副学長，附属図書館長，  
アカデミック・リンク・センター長，人文科学研究院教授  
竹内 比呂也（司会）

ただ今より、千葉大学アカデミック・リンク・センターALPSプログラム第4回シンポジウムを始めたいと思います。私はアカデミック・リンク・センター長の竹内です。本日はお忙しい中、多くの方にお越しいただきましたことに感謝を申し上げます。

今回のシンポジウムのテーマは「米国高等教育におけるアカデミック・アドバイジング」で、サブタイトルは「アカデミック・アドバイザー養成と専門職団体（NACADA）の役割」として、講演者にはNACADAの専務理事でいらっしゃいますチャーリー・ナット先生をお迎えしております。

私どものアカデミック・リンク・センターのALPSプログラムでは年1回のシンポジウムと年5回のセミナーを開催しており、シンポジウムでは比較的大きなテーマを選んで、国内外の著名な研究者、あるいはその領域の専門家に来ていただいてお話をいただくということを繰り返してきました。本日、お手元の資料の中に前回のシンポジウムの記録である冊子があります。私どもはこのような冊子を作っていくながら、教育・学修支援の専門職、教育・学修支援という概念そのものが日本の高等教育に広がっていくことを目指して活動しています。

今回のテーマであるアカデミック・アドバイジングは、日本国内ではまだ新しい概念であろうと思っています。しかし、これからの高等教育の質の向上を考える中で日本の大学の多くがレイト・スペシャライゼーションに関心を持ち、入学時ではなく、入学して何年かしてから進級するプロセスの中で自分の専門を決めていくということ、これが一般化していくかどうかは現時点ではまだ分かりませんが、このような傾向が広がっていくのではないかとこの兆しが今日のさまざまな大学での教育改革の取り組みの中で見えてきています。今回、アカデミック・アドバイジングというテーマでシンポジウムを開くことは、われわれとしては、言ってみれば新しいドアを開くようなものであります



し、また、教育・学修支援の一環としてのアカデミック・アドバイジングに対する理解が広まっていくことを強く期待するものです。

また、本日のプログラムの中では、短時間ではありますが、我妻から私どもが現在進めておりますALPSプログラムの進捗状況についても報告させていただき、その知見についても広く共有できればと考えているところです。本日はいつもよりも少し長い時間となっておりますが、皆さまにはぜひ最後までご集中いただいて、より実りある議論ができることを強く期待しているところです。

どうもありがとうございました。

# 第 1 部

---

## 報 告



## 千葉大学における教育・学修支援専門職養成プログラム (ALPSプログラム) について

千葉大学アカデミック・リンク・センター  
特任助教  
我妻 鉄也

皆さま、こんにちは。千葉大学の我妻と申します。本日は20分ほどお時間をいただき、私ども千葉大学アカデミック・リンク・センターのALPSプログラムについて報告させていただきます。本日は、「教育・学修支援専門職の育成の必要性」「千葉大学アカデミック・リンク・センターにおける教育・学修支援専門職養成の取組」「ALPS履修証明プログラム」「今後の展開」についてお話ししたいと考えています【スライド①-2】。

### 1. 「教育・学修支援専門職」育成の必要性

まずは教育・学修支援専門職育成の必要性について【スライド①-3】、こちらは皆さんご存じかと思いますが、2012年に中央教育審議会より出された答申によって大学教育の質的転換が重要視されています。学生の能動的学修への転換、学修時間の増加・確保、学位プログラムとしての組織的・体系的教育課程への転換といったことです。また、高度専門職に関して、2014年2月に中央教育審議会大学分科会より出された「大学のガバナンス改革の推進について」で議論されています。高度専門職の設置に関しては、教務や学生支援の分野についても言及されています。さらに、皆さんご存じのとおり、2017年には大学設置基準の一部改正によってスタッフ・ディベロップメントが義務化されました。このような形で、教育・学修支援の分野のみならず、専門職の育成が重要になっているのではないかと思います。

文部科学省の先導的・大学改革推進委託事業で行われた調査によると、学修支援に関わる専門的職員を配置している大学は全体で25.5%となっています【スライド①-4】。内訳は国立大学で30.2%、公立大学で15.4%、私立大学で27.4%、短期大学で23.9%です。また、職種別に見た場合は教員が11.7%、事務職員が13.2%、技術職員が1.4%

です。全国の4分の1の大学が学修支援に関わる専門的職員を配置していることが分かるかと思います。

続いて、千葉大学における教育・学修支援の取組についてお話しします【スライド①-5】。千葉大学における教育・学修支援の考え方についてですが、アカデミック・リンクでは、図書館機能を高等教育における教育・学修支援という文脈でどのように生かすことができるか、あるいは図書館の持っている潜在的な能力・可能性を教育・学修支援の文脈の中でどのように生かせるかということを考えて、2011年から実践を行っています。学生に対する人的支援の重要性は、アカデミック・リンクのコンセプト形成時やその後の実践において、アカデミック・リンクを構成する主要な要素として認識されていました。そして、そのような学生への人的支援を効果的に実施するためには、その人材を体系的に育成することが肝要だと考えています。

千葉大学における教育・学修支援の取組をご紹介します【スライド①-6】。一つ目が、図書系による教育・学修支援です。私どもが所属しているアカデミック・リンク・センターは、アクティブ・ラーニング・スペース、コンテンツ・ラボ、ティーチング・ハブの三つの機能から成り、学生アシスタントの配置、動画や教材等のコンテンツの作成支援、FDやセミナー等の実施を行っています。また、組織運営の基本的な考え方として「教職協働」をコンセプトに組み入れた組織運営をしています。

この他に学務系による教育・学修支援として、学生生活支援・学生相談・障がい学生支援、海外留学・留学生支援、キャリア形成支援、各部局による教務・カリキュラム・授業運営支援などが行われています。また、2016年度に開設された国際教養学部においてSULA (Super University Learning Administrator) という専門的職員を配置し、学内展開しています。

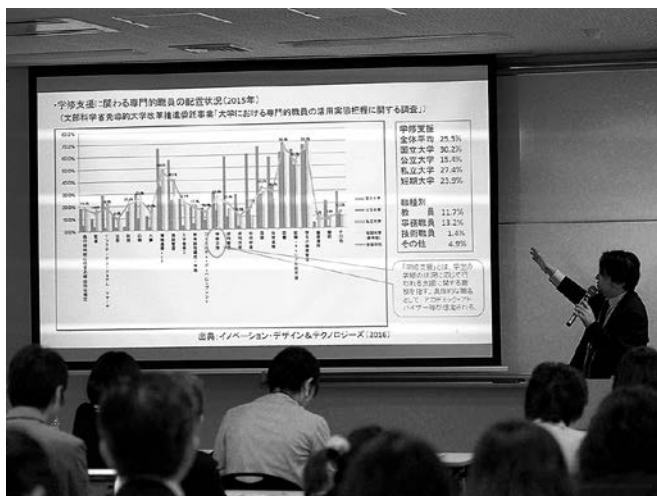
## 2. 千葉大学アカデミック・リンク・センターにおける「教育・学修支援専門職」養成の取組

千葉大学アカデミック・リンク・センターにおける教育・学修支援専門職養成の取組についてご説明します。初めに、本日のシンポジウムはALPSシンポジウムと称しておりますが、私どもアカデミック・リンク・センターは教育関係共同利用拠点の選定を2021年まで受けており、こちらの事業で取り組む活動をアカデミック・リンク教育・学修支援専門職養成プログラム (ALPSプログラム: Academic Link Professional

Staff Development Program) と称しています。本プログラムでは、これからの大学に必要とされる新たな専門的職員として、高度な実践力、体系化された関連知見、新しい教育の開発・企画力を有する教育・学修支援専門職の確立と養成を目的とした研修プログラムに取り組んでいるところです【スライド①-7】。

ALPSプログラムの全体像としては、教育・学修支援専門職に必要な能力ルーブリックの開発と段階的研修プログラムの構築、教育・学修支援専門職を養成する実践的SDプログラム（履修証明プログラム）の運営、セミナー・シンポジウムの定期的な開催、教育・学修支援実務の全国拠点としての情報発信と教育・学修支援専門職によるネットワーク形成の推進の四つについて主に取り組んでいます【スライド①-8】。

続いて、教育・学修支援の専門性に必要な能力項目・能力ルーブリックの開発についてご説明します。「教育・学修支援」の専門性を捉える枠組みですが【スライド①-9】、教育・学修支援に求められる資質、能力や専門性を個々の職務に横断するものとして捉えています。「教育・学修支援」には、キャリア形成支援や教務・カリキュラム授業運営支援、学修支援・学修相談、海外留学・留学生支援など、さまざまなものがあると思うのですが、これらは個々の職務に横断するものと考えているということです。さらに、大学内にあるさまざまな機能・役割の重なり合う部分であるとともに、既存の職制や一般的な基礎的資質・能力では捉え切れない新たなニーズを含むものとして定義しています。一般的な基礎的資質や能力では捉えきれない教育・学修支援の専門性が新たな



ニーズとして存在するという事です。こういった汎用性や通用性を持った教育・学修支援の資質・能力を可視化するために、教育・学修支援の専門性に必要な能力ルーブリックの開発に取り組んでいます。

教育・学修支援の専門性に必要な能力項目・能力ルーブリック開発のプロセスですが、939件の文献調査、6大学・29名の現職大学職員を対象としたインタビュー調査、10大学・712名の現職大学職員へのアンケート調査を行い、さらに米国の学修支援に関する専門職団体であるACPAやNASPAによる学修支援専門職のコンピテンシー基準であるProfessional Competency Areas for Students Affairs Educatorsを参照して作成しました【スライド①-10】。

続いて、教育・学修支援の専門性に必要な能力項目についてご説明します【スライド①-11】。教育・学修支援の専門性を向上させていくためには目指すべき具体的な能力指標が必要なことから、教育・学修支援の専門性に必要な能力項目を開発しています。これはそれぞれ領域を設けており、理解する内容、対人関係、基盤的スキルという縦軸に記載された領域と、学生・学修支援への関心、担当業務の遂行、大学職員としての共通性という横軸に記載された領域があります。

「学生・学修支援への関心」の領域で理解する内容としては、教育内容の把握、学生・学修・教育支援の設計と実施、学生・学修・教育支援活動のプログラム改善、学生・学修支援の現状理解といった項目があります。「担当業務の遂行」の領域では、課題の設定と問題解決、情報収集・整理・分析・発信、業務に関する知識、さまざまな経験とその活用といった項目があります。さらに「大学職員の共通性」の領域では、高等教育・社会・教育に関する知識と所属大学についての理解といった項目があります。

また、対人関係という領域では、学生への対応として、学生対応への基本的な姿勢・態度、留学生への対応、困難を抱えた学生への対応という項目があります。担当業務への取り組み方としては、担当業務の遂行やチームワークといった項目が挙げられます。さらに人間関係の構築という領域があって、人的ネットワークや教員との連携・協働といった項目があります。その土台となる基盤的スキルとしてキャリアアップ・スキルアップの取組、ICTスキル、語学、クリティカルシンキングといった項目が設けられています。

続いて、教育・学修支援の専門性に必要なルーブリックについてですが、このルーブリックは大学における教育・学修支援の専門性の向上を実現するために、その能力指標について段階を踏まえて体系化・可視化することを目指して開発したものです。ここでは例として「学生・学修・教育支援の内容」という領域に関してご説明します【スラ

**イド①-12】**。本ルーブリックでは、S、A、B、Cというランクが設けられており、Sが「知識やスキルを発展させ、指導することができる」、Aが「知識やスキルを実践の場の問題解決に応用できる」、Bが「身に付けた知識を説明できる」、Cが「知識として身に付けている」という形になっています。

「学生・学修・教育支援の内容」という領域で言うと、Cは「教育支援や学修支援の担当者に必要な法令遵守の意識、倫理観を身に付けている」、Bは「学修支援に必要な教育領域における最新の改善課題、論点、教育方法を説明することができる」、Aは「個々の学生に応じた支援内容・方法を選定し、必要な支援を設計、提案することができる」、Sは「学生の支援ニーズを調査し、学習者のニーズに合わせた学修支援を開発し、効果的に実施することができる」という指標が設けられています。

ルーブリックの全体像としては、「学生・学修・教育支援の内容」のほかに「担当業務の内容」「大学についての知識」「学生への対応」「担当業務への取り組み方」「人間関係の構築」という六つの項目に関して、それぞれの段階に応じてどういったことが求められるのかが示されています【**スライド①-13**】。これは大変細かいので、詳細に関してご関心のある方はぜひホームページにアクセスしてご覧いただければと思います。

続いて、教育・学修支援の高度化を図るための先駆的取組から学ぶ研修会についてですが、セミナーを年5回、また、本日のようなシンポジウムを年1回開催しています【**スライド①-14**】。さらにシンポジウムの内容に基づいてALPSブックレットを刊行しています。

### 3. ALPS履修証明プログラムについて

私どもが実施しているALPS履修証明プログラムについてご説明します【**スライド①-15**】。履修証明プログラムとは学校教育法第105条に基づく仕組みであり、大学の積極的な社会貢献を促進するために、社会人等を対象とした一定のまとまりのある学習プログラムを特別の課程として開設し、その修了者に対して履修証明書を交付するもので、120時間以上で構成されています。

ALPS履修証明プログラムは、教育・学修支援の専門性を高めるための体系的な研修プログラムとして、2016年度の試行を経て2017年度から履修証明プログラムを本格実施しました【**スライド①-16**】。さらに、先ほど一部をお示ししましたが、ルーブリックの各領域に対応する形で15コースを設定し、各コース8時間、全体で120時間以上

の研修プログラムとなっています。修了年限は2年以上で、全てのコースの修了者に対しては学校教育法第105条に基づく履修証明書を発行しています。

内容としては、15コースを基盤的テーマ、総合的テーマ、総括的テーマに区分しています【スライド①-17】。基盤的テーマは、教育・学修支援の専門性を高めるために共通に修得する内容として11コースで構成されています。例えば「高等教育政策と自校理解」や本日のシンポジウムのテーマである「学修支援とアカデミック・アドバイジング」、それから「学生・学修に対する理解」などのコースが開講されています。各基盤的テーマはe-learningと対面授業による構成となっています。総合的テーマは、履修生同士のグループワークを通じた探求学習により、教育・学修支援を実践するための手法を習得する科目として、「教育・学修支援マネジメント」の(1)と(2)が開講されています。総括的テーマは、教育・学修支援を推進するために、個々の履修生が自らの職務・問題意識の中から具体的なテーマを設定し、実践的にその高度化を図ることで具体的な課題解決を企画・実践する内容で、「プロジェクト研究」と「プロジェクト実習」を開講しています。

また、カリキュラムマップを作成しており、ルーブリックの項目と各コースの対応関係を示しています【スライド①-18】。例えば「高等教育政策と自校理解」は能力ルーブリックでは「学生・学修・教育支援の内容」のC、「大学についての知識」のC、「人間関係の構築」のCに該当します。

2年間の受講の流れとしては、各年度の夏期と春期に基盤的テーマや総合的・総括的テーマを履修し、全てのテーマを受講すると履修証明書が授与されます【スライド①-19】。ALPS履修証明プログラムの受講者の状況ですが、対象者は「現在、教育・学修支援に携わっている／今後携わりたいと考えている大学教職員、大学院生、その他関係者」となります【スライド①-22】。募集定員は30名で、第1期生は31名でした。所属機関からの推薦や業務命令で受講した方が39%、自身の希望で受講した方が61%です。第2期の履修生は14名となっています。履修生の評価は、2017年度夏期開講コースの満足度ですが、e-learning、対面授業とも約7割が満足しています【スライド①-23】。

## 4. 今後の展開

最後に、今後の展開ですが【スライド①-24】、まず教育・学修支援専門職によるネットワーク形成の推進ということで、主にALPS履修証明プログラムの修了者を中心に、




大学における教育・学修支援を職務とする者による教育・学修支援専門職能団体の組織化ができればと考えています。また、教育・学修支援実務の全国拠点としての情報発信や、職業実践力育成プログラム（BP）への申請といったことを考えています。


限られた時間でしたが、以上でALPSプログラムのご報告とさせていただきます。ご清聴ありがとうございました。

## スライド資料①

### 〔スライド①-1〕



CHIBA UNIVERSITY



ALPS アカデミック・リンク・教育・学修支援専門職養成プログラム  
ACADEMIC LINK PROFESSIONAL SKILL DEVELOPMENT PROGRAM BY EDUCATIONAL LEARNING SUPPORT

ALPSプログラム 第4回シンポジウム  
『米国高等教育におけるアカデミック・アドバイジング』  
ALPSプログラム報告

# 千葉大学における教育・学修支援専門職養成プログラム (ALPSプログラム)について

我妻鉄也(千葉大学 アカデミック・リンク・センター)

1

### 〔スライド①-2〕

## 本日の内容

1. 「教育・学修支援専門職」育成の必要性
2. 千葉大学アカデミック・リンク・センターにおける教育・学修支援専門職養成の取組
3. ALPS履修証明プログラムについて
4. 今後の展開

2

〔スライド①-3〕

1. 「教育・学修支援専門職」育成の必要性

(1) 「教育・学修支援専門職」育成の必要性

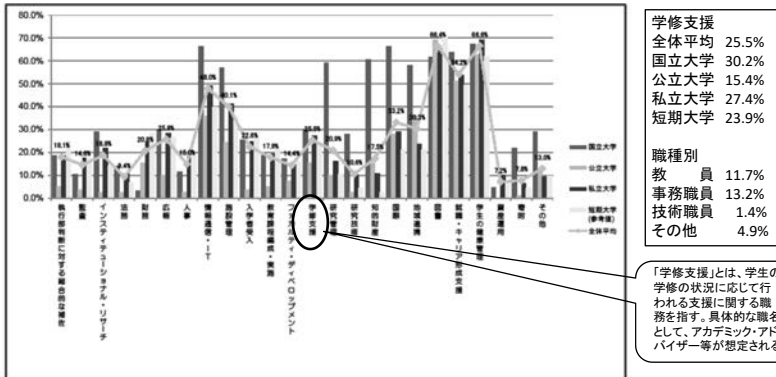
- 「大学教育の質的転換」の必要性  
 学生の能動的学修への転換、学修時間の増加・確保、学位プログラムとしての組織的・体系的教育課程への転換。  
 中央教育審議会答申『新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて』（2012年8月）
- 「高度専門職」に関する議論  
 中央教育審議会大学分科会『大学のガバナンス改革の推進について（審議のまとめ）』（2014年2月）では、「高度専門職」の設置に関して、教務や学生支援の分野についても言及。
- 2017年の大学設置基準の一部改正によるスタッフ・ディベロップメント(SD)の義務化  
 (研修の機会等)  
 第四十二条の三 大学は、当該大学の教育研究活動等の適切かつ効果的な運営を図るため、その職員に必要な知識及び技能を習得させ、並びにその能力及び資質を向上させるための研修(第二十五条の三に規定する研修に該当するものを除く。)の機会を設けることその他必要な取組を行うものとする。

3

〔スライド①-4〕

・学修支援に関わる専門の職員の配置状況(2015年)

(文部科学省先導的の大学改革推進委託事業「大学における専門的職員の活用実態把握に関する調査」)



出典：イノベーション・デザイン&テクノロジーズ(2016)

4

〔スライド①-5〕

(2) 千葉大学における教育・学修支援の取組

① 千葉大学における教育・学修支援の考え方

- ・アカデミック・リンクでは、図書館機能を高等教育における教育・学修支援という文脈でどのように生かすことができるか、あるいは図書館の持っている潜在的な能力、可能性を教育・学修支援の文脈の中でどのように生かすことができるかということを考えて2011年度から実践を開始。
- ・人的支援の重要性は、アカデミック・リンクのコンセプト形成時やその後の実践において、アカデミック・リンクを構成する主要な要素として、認識されていた。
- ・人的支援を効果的に実施するためには、その人材を体系的に育成することが肝要。

出典：竹内(2017:22)

5

〔スライド①-6〕

② 千葉大学における教育・学修支援の取組

- ・図書系による教育・学修支援
  - ・アカデミック・リンク・センターの設置
    - ・「アクティブ・ラーニング・スペース」「コンテンツ・ラボ」「ティーチング・ハブ」の3つ機能
    - ・ALSA (Academic Link Student Assistant) : GS・TT・LS
    - ・動画や教材等のコンテンツ作成支援
    - ・FDやセミナー等の実施
  - ・「教職協働」をコンセプトに組み入れた組織運営
- ・学務系による教育・学修支援
  - ・学生生活支援、学生相談、障害学生支援
  - ・海外留学・留学生支援
  - ・キャリア形成支援
  - ・各部局における教務・カリキュラム・授業運営支援など
- ・新学部「国際教養学部」(2016年度開設)における「SULA」の配置と学内展開
  - ・SULA (Super University Learning Administrator)
  - ・教育・学修支援をワンストップで担う学務系専門職



ALSAによる分野別学習相談

6



〔スライド①-9〕

(2)「教育・学修支援の専門性に必要な能力項目・能力ルーブリック(試案)」の開発

①「教育・学修支援」の専門性を捉える枠組み

・教育・学修支援に求められる資質・能力や専門性を個々の職務に横断するものとして捉える。  
 ・大学内にある様々な機能・役割の重なり合う部分であるとともに既存の職制や一般的な基礎的資質・能力では捉えきれない新たなニーズを含むものとして定義。  
 ⇒汎用性・通用性を持った教育・学修支援についての資質・能力の可視化

出典:岡田他(2016), 岡田(2018)

〔スライド①-10〕

②「教育・学修支援の専門性に必要な能力項目・能力ルーブリック(試案)」の開発のプロセス

- ・939件の文献調査
- ・6大学29名の現職大学職員を対象としたインタビュー調査
- ・10大学712名の現職大学職員へのアンケート調査
- ・米国の学修支援に関する専門職団体であるACPAとNASPAによる学修支援専門職のコンピテンシー基準であるProfessional Competency Areas for Students Affairs Educatorsを参照

出典:岡田他(2016), 白川(2016), 竹内(2017)

[スライド①-11]

③教育・学修支援の専門性に必要な能力項目(試案)

・教育・学修支援の専門性を向上させていくためには、目指すべき具体的な能力指標が必要なことから、教育・学修支援の専門性に必要な能力項目を開発

	学生・学修支援への関心	担当業務の遂行	大学職員としての共通性
理解する内容	①学生・学修・教育支援の内容 ・教育内容の把握 ・学生・学修・教育支援の設計と実施 ・学生・学修・教育支援活動のプログラム改善 ・学生・学修支援の現状理解	②担当業務の内容 ・課題の設定と問題解決 ・情報収集・整理・分析・発信 ・業務に関する知識 ・様々な経験とその活用	③大学についての知識 ・高等教育・社会・教育に関する知識 ・所属大学についての理解
対人関係	④学生への対応 ・学生対応への基本的姿勢・態度 ・留學生への対応 ・困難を抱えた学生への対応	⑤担当業務への取り組み方 ・担当業務の遂行 ・チームワーク	⑥人間関係の構築 ・人的ネットワーク ・教員との連携・協働
基礎的スキル			基礎的スキル ・キャリアアップ・スキルアップの取組 ・ICTスキル ・物事を広くみる ・語学 ・クリティカルシンキング ・説明できる力 ・文書作成能力 ・メタ的能力(社会人としてのコンピテンシー)

11

[スライド①-12]

④教育・学修支援の専門性に必要な能力ルーブリック(試案)

・「教育・学修支援の専門性に必要な能力ルーブリック(試案)」は、大学における教育・学修支援の専門性の向上を実現するためにその能力指標を、段階を踏まえて体系化・可視化することを目指して開発

領域	項目 (各領域で含む要素を具体的に示したものを)	S (知識やスキルを発展させ、指導することができる)	A (知識やスキルを実際の場の問題解決に応用できる)	B (身につけた知識を説明できる)	C (知識として身に付けている)
①学生・学修・教育支援の内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教育内容の把握</li> <li>・学生・学修・教育支援の内容の設計と実施</li> <li>・学生・学修・教育支援活動のプログラム改善</li> <li>・学生・学修支援の現状理解</li> </ul>	<p>学生の支援ニーズを調査し、学習者のニーズにあわせて学修支援を開発し、効果的に実施することができる。</p> <p>様々な教育領域の教育上の最新の改善課題、論点、教育方法を把握し、個別の授業ニーズにあわせた教育支援に活用することができる。</p> <p>そして、学修支援・教育支援の結果を検証し、評価、改善することができる。</p>	<p>個々の学生に応じた支援内容・方法を選定し、必要な支援を設計、実施することができる。</p> <p>また、所属大学全体の教育課題の概要を理解した上で、学内外の先進的な取り組み事例を参考に、個別の授業に対して教育支援を具体的に提案することができる。</p>	<p>学修支援に必要な教育領域における最新の改善課題、論点、教育方法を説明することができる。</p> <p>また、学生の多様性を理解し、個々人の学習上の課題を踏まえた支援を説明することができる。</p>	<p>教育支援や学修支援の担当者に必要な法令遵守の意識、倫理観を身に付けている。</p> <p>また、学修支援に必要な教育課題の基本的枠組みと個々の授業が従っている教育内容の概要を理解している。</p>

12

[スライド①-13]

課 業	課 業 内 容	A	B	C
①学生・学修支援活動の目的	・教育活動の充実 ・学生・学修支援活動の円滑化と推進 ・学生・学修支援活動のALPSプログラムの推進 ・学生・学修支援の発展	①学生のニーズを把握し、学修支援の中心となる学修支援活動を行い、効果的に実施することを目指す。②学修支援活動の推進と向上を図る。③学修支援活動の推進と向上を図る。④学修支援活動の推進と向上を図る。	①学生のニーズを把握し、学修支援の中心となる学修支援活動を行い、効果的に実施することを目指す。②学修支援活動の推進と向上を図る。③学修支援活動の推進と向上を図る。④学修支援活動の推進と向上を図る。	①学生のニーズを把握し、学修支援の中心となる学修支援活動を行い、効果的に実施することを目指す。②学修支援活動の推進と向上を図る。③学修支援活動の推進と向上を図る。④学修支援活動の推進と向上を図る。
②教育支援の内容	・学修支援の充実 ・学修支援の推進 ・学修支援の推進 ・学修支援の推進	①学修支援の推進と向上を図る。②学修支援の推進と向上を図る。③学修支援の推進と向上を図る。④学修支援の推進と向上を図る。	①学修支援の推進と向上を図る。②学修支援の推進と向上を図る。③学修支援の推進と向上を図る。④学修支援の推進と向上を図る。	①学修支援の推進と向上を図る。②学修支援の推進と向上を図る。③学修支援の推進と向上を図る。④学修支援の推進と向上を図る。
③教育支援の体制	・学修支援の推進 ・学修支援の推進 ・学修支援の推進	①学修支援の推進と向上を図る。②学修支援の推進と向上を図る。③学修支援の推進と向上を図る。④学修支援の推進と向上を図る。	①学修支援の推進と向上を図る。②学修支援の推進と向上を図る。③学修支援の推進と向上を図る。④学修支援の推進と向上を図る。	①学修支援の推進と向上を図る。②学修支援の推進と向上を図る。③学修支援の推進と向上を図る。④学修支援の推進と向上を図る。
④教育支援への取り組み	・学修支援の推進 ・学修支援の推進 ・学修支援の推進	①学修支援の推進と向上を図る。②学修支援の推進と向上を図る。③学修支援の推進と向上を図る。④学修支援の推進と向上を図る。	①学修支援の推進と向上を図る。②学修支援の推進と向上を図る。③学修支援の推進と向上を図る。④学修支援の推進と向上を図る。	①学修支援の推進と向上を図る。②学修支援の推進と向上を図る。③学修支援の推進と向上を図る。④学修支援の推進と向上を図る。
⑤人材育成の推進	・人材育成の推進 ・人材育成の推進 ・人材育成の推進	①人材育成の推進と向上を図る。②人材育成の推進と向上を図る。③人材育成の推進と向上を図る。④人材育成の推進と向上を図る。	①人材育成の推進と向上を図る。②人材育成の推進と向上を図る。③人材育成の推進と向上を図る。④人材育成の推進と向上を図る。	①人材育成の推進と向上を図る。②人材育成の推進と向上を図る。③人材育成の推進と向上を図る。④人材育成の推進と向上を図る。

出典 : <https://alc.chiba-u.jp/ALPS/rubric.html> 13

[スライド①-14]

(3)教育・学修支援の高度化を図るための先駆的取組から学ぶ研修会 (ALPSセミナー・ALPSシンポジウム) の実施

・ALPSセミナーの実施 (年5回)

・ALPSシンポジウムの実施 (年1回)



・ALPS ブックレットの発行





〔スライド①-15〕

3. ALPS履修証明プログラムについて

(1)ALPS履修証明プログラムの概要

①履修証明プログラムとは

- ・学校教育法第105条に基づく仕組みであり、大学の積極的な社会貢献を促進するために、社会人等を対象とした一定のまとまりのある学習プログラム(履修証明プログラム)を特別の課程として開設し、その修了者に対して履修証明書を交付するもの。120時間以上で構成。

学校教育法  
 第百五条 大学は、文部科学大臣の定めるところにより、当該大学の学生以外の者を対象とした特別の課程を編成し、これを修了した者に対し、修了の事実を証する証明書を交付することができる。

15

〔スライド①-16〕

②ALPS履修証明プログラムの概要

- ・教育・学修支援の専門性を高めるための体系的な研修プログラムとして、2016年度の試行(3コース)を経て、2017年度から履修証明プログラムの本格実施。
- ・「教育・学修支援の専門性に必要な能力ルーブリック」の6領域に対応するかたちで、15コースを設定し、各コース8時間、全体で120時間以上の研修プログラム。
- ・最低修了年限は2年間。全てのコースの受講者に対しては、学校教育法第105条に基づく履修証明書を発行。



【基礎的テーマ】コース受講の様子



【総合的テーマ】コース受講の様子

16

【スライド①-17】

(2)ALPS履修証明プログラムの内容

・15コースを【基盤的テーマ】【総合的テーマ】【総括的テーマ】に区分

【基盤的テーマ】

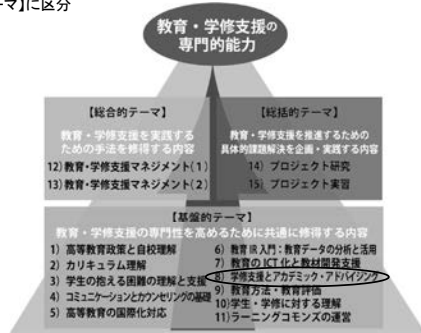
教育・学修支援の専門性を高めるために共通に修得する内容として、11のコースで構成

【総合的テーマ】

履修生同士のグループワークを通じた探求学習により、教育・学修支援を実践するための手法を修得する内容

【総括的テーマ】

教育・学修支援を推進するために、個々の履修生が自らの職務・問題意識の中から具体的なテーマを設定し、実践的にその高度化を図ることで、具体的な課題解決を企画・実践する内容



17

【スライド①-18】

(3)カリキュラムマップ

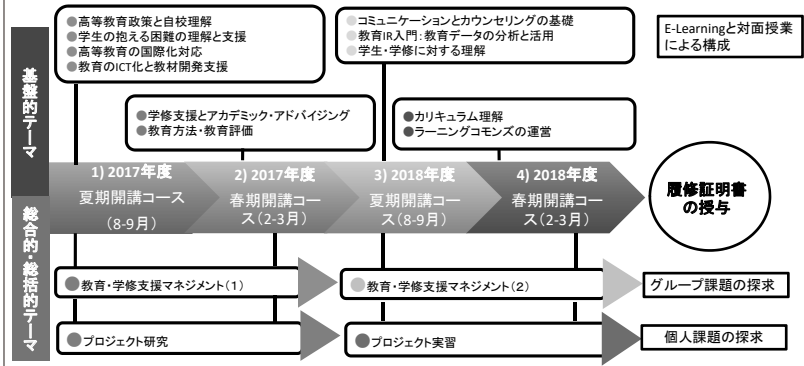
プログラム15テーマ

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
各コースが、ルーブリックの各領域のS・A・B・Cの段階のどこに対応するかを示したものを															
① 学生・学修・教育支援の内容	C	B	C	C	C	B	B	B	B	B	B	C	B	A	A
② 教育実践の基礎															
③ 前出業務への取り組み															
④ 人間関係の構築	C		C	B			C	C	C	C	C	C	B	A	A

18

[スライド①-19]

(4)2年間の受講の流れ<第1期生の場合>



19

[スライド①-20]

・E-Learning



20

【スライド①-21】

・対面授業



【基礎的テーマ】コース受講の様子



【基礎的テーマ】コース受講の様子



【総合的テーマ】コース受講の様子



【総合的テーマ】コース受講の様子

21

【スライド①-22】

(5) ALPS履修証明プログラム受講者の状況

・ALPS履修証明プログラムの対象者

現在、教育・学修支援に携わっている/今後携わりたいと考えている大学教職員、大学院生、その他関係者

・募集定員:30名

・受講料:年額6万円

・第1期履修生:31名(所属機関からの推薦・業務命令:39%、自身の希望:61%)

・第2期履修生:14名



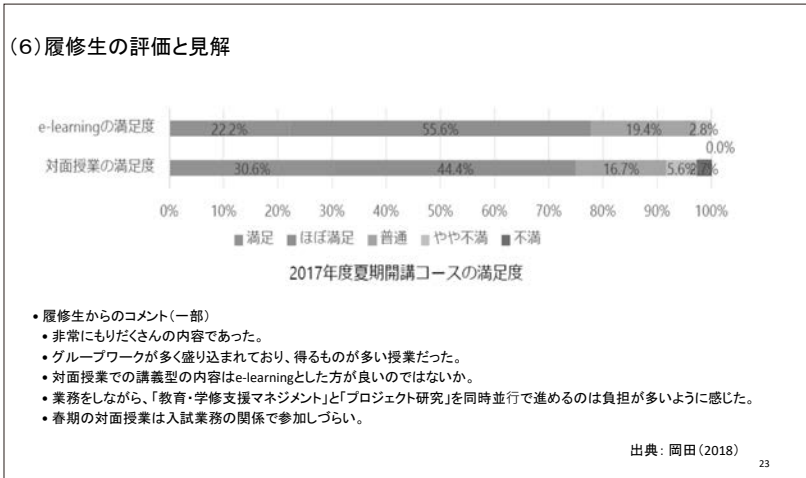
【基礎的テーマ】コース受講の様子



【総合的テーマ】コース受講の様子

22

〔スライド①-23〕



23

〔スライド①-24〕

4. 今後の展開

- 教育・学修支援専門職によるネットワーク形成の推進  
ALPS履修証明プログラム修了者を中心に、大学における教育・学修支援を職務とする者による「教育・学修支援専門職能団体」の組織化
- 教育・学修支援実務の全国拠点としての情報発信
- 職業実践力育成プログラム(BP)への申請

24

## 〔スライド①-25〕

## 参考文献

- 中央教育審議会, 2012, 『新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～(答申)』。
- 中央教育審議会大学分科会, 2014, 『大学のがバランス改革の推進について(審議のまとめ)』。
- イノベーション・デザイン&テクノロジーズ, 2016, 『大学における専門的職員の活用実態把握に関する調査報告書』イノベーション・デザイン&テクノロジーズ。
- 岡田聡志・白川優治・米田奈穂・谷奈穂・御手洗明佳・多田伸生・奥田聡子・竹内比呂也, 2016, 「教育・学修支援に求められる大学職員の資質・能力と専門性に関する探索的研究」『大学教育学会誌』38(2): 47-56。
- 岡田聡志, 2018, 「大学における教育・学修支援の専門職開発 - 千葉大学ALPSプログラムの構築と運営 -」, 大学教育学会第40回大会, 筑波大学。
- 白川優治, 2016, 「教育・学修支援に必要な能力項目・能力ルーブリック(試案)千葉大学アカデミック・リンク・センター編『新しい専門的大学の職員に求められる教育・学修支援の専門職性とその養成』千葉大学アカデミックリンクセンター, 8-36。
- 竹内比呂也・白川優治・山崎千鶴・井上真琴, 2016, 「これからの大学における教育・学修支援の専門性」『大学教育学会誌』38(2): 99-103。
- 竹内比呂也, 2017, 「大学において教育や学修を支援すること—個別的な実践から専門職能の理解へ—」『大学教育学会誌』39(1): 21-5。

25

## 〔スライド①-26〕

ご清聴ありがとうございました。

26



# 第 2 部

---

講 演





## 米国におけるアカデミック・ アドバイジングの理論と実 践：NACADAの役割

NACADA (National Academic  
Advising Association) 専務理事  
チャーリー・ナット氏 (Dr.Charie Nutt)

チャーリー・ナット氏の講演は英語（逐次通訳あり）で行われました。以下は、音声データをもとに日本語訳したものです。英文での講演内容はP.64～をご覧ください。

**(司会・竹内)** それでは、今日のメインであるチャーリー・ナット先生のご講演をお願いしたいと思います。演題は「米国におけるアカデミック・アドバイジングの理論と実践：NACADAの役割」です。

ナット先生は1991年にNACADAのメンバーになられ、2002年よりNACADA事務局およびカンザス州立大学に勤務されました。現在はNACADA専務理事という立場で、米国におけるアカデミック・アドバイジングを先導されていると言ってよいかと思えます。それではナット先生、よろしくお願いします。

**(ナット)** このたびはシンポジウムにご招待いただき、誠にありがとうございます。皆さまにお目にかかれて、とてもうれしく思っていますし、このプレゼンテーションができることを非常にわくわくして待っていました。

最初に千葉大学の皆さんの取組に対して、このような本当に素晴らしいルーブリックを作ったことに賞賛の意を表したいと思っています。私が専務理事をしているNACADAの素晴らしいメリットは、何か良いことがあったときにそれを共有し、情報を互いに知らせ合うところですよ。千葉大学の皆さんが開発されたこのルーブリックに私は本当に感動したので、ぜひこれを米国に持ち帰って、みんなと共有したいと思っています。もちろん素晴らしいものでない限り共有しませんから、これは私が本当にこのルーブリックを素晴らしいと思っている証拠だろうと思います。

今日はアカデミック・アドバイジングとは何か、その理論や実践についてお話をします。それが米国においてどうなっているのか、また、日本や世界と比べてそれがどうなのかというお話です。

なお、今、私の南ジョージアの英語を通訳者が日本語に直しているということで、これはすごい技であると思っています。

## 1. 学生の成功のために

私の大好きな、高等教育とは何であるかをうまく表現した言葉があります【スライド②-2】。1964年に合衆国の保健教育福祉省長官であるガードナー氏が言った、「解決されていない問題として見ないふりをしているような状態だが、私たちは今、非常に素晴らしい機会に直面している」という言葉です。今、高等教育の現場以上に問題のある分野はないのではないのでしょうか。世界全体で予算、財政的な問題があり、学生数が減っているにもかかわらず、学生の負担は増えています。まず私たちにできることとして、解決策を提供することに集中しなければいけません。そして今、改善するチャンスがあるわけです。それをせずただ座って、学生たちが大学生活、あるいは社会生活において成功できないのを漫然と見ているという選択肢もあると思いますが、皆さんが今日ここに参加しているのは、学生たちの成功を望んでいるからだと思います。今、私たちの目の前に改善するチャンスが訪れているのです。

皆さまにぜひ読んでいただきたい論文があります【スライド②-3】。これは「アカデミック・アドバイジングのプロフェッショナル化：2010年の現状」というもので、NACADAのジャーナルのサイトからご覧いただけます。こちらに出典があります。ここに書かれている結論は、私たちが現在も考えなければならないことです。今日はそれについて私のプレゼンテーションの中でいろいろお話をしていきたいと思いますが、アカデミック・アドバイジングの知識と理論のレベルの向上、アカデミック・アドバイジングの質の向上のための調査・研究とそれに対する理解のさらなる深化といったことです。また、千葉大学のモデルを使うということは素晴らしいと思いますが、学生に対するアカデミック・アドバイジングの効果やその影響に関して検証を始めていくということです。

私たちがやらなければならない仕事は、さまざまな分野において学生の成功を助けることです【スライド②-4】。例えば学業の目標、キャリアの目標、人生の目標、そして

学生たちの夢と情熱です。アカデミック・アドバイジングとは、単に彼らがコースを選択するのを助けることではありません。アカデミック・アドバイジングとは、学生のさまざまな分野における成功率を上げることです。私たちがやっていることは何なのか、また、なぜそういうことをするのかを理解することでもあります。皆さんは当然、アカデミック・アドバイジングの重要性を認識していると思います。問題は、その皆さんが認識している重要性を皆さんの同僚や事務局、学生たちに理解してもらうことです。それが私たちの仕事の一部です。

現在、学生たちの成功を過去よりも非常に難しくしている要因とその複雑性について考えてみましょう【スライド②-5】。まず、大学のミッションが変わってきたということがあります。これは世界中で起きています。例えば日本では2年制の学校が減っており、英国ではファカルティの役割が大きく変わっています。米国では2年制の大学が4年制になり、いわゆるユニバーシティになっています。さらにオンラインの教育機関が増えており、これは過去に例を見ないことです。このようにミッションが変わったことが、学生とアカデミック・アドバイジングに大きなインパクトを与えています。

学生の人口構成にも変化があります。構成員が10年前と比べて、あるいは5年前と比べても変わっています。これは世界中で起きていることですが、自分が家族の中で初めて大学に入学したという人たちの割合が非常に増えています。これは兄弟・姉妹も親も大学に行ったことがなく、その人が家族の中で初めて大学に行ったという意味です。



実は、私もそうなのです。私には兄がいますが、大学には行きませんでした。また、妹は子どもを産んでから初めて大学に行きました。私は生まれてからずっと「君は大学に行くのだよ」と言われて育ちました。そして、恐らくそのとおりになるのだろうと思って頑張ってきました。私が南東のジョージアの高校を卒業した後、工場で働いていると、8月のある日に電話がかかってきました。「はい、何のご用ですか」と私が尋ねると、電話の相手は「チャーリー・ナットさんですか、私はフレッド・グリフィスです」と言われました。彼は私が住んでいた町のコミュニティカレッジの教務担当者で、私はそこに行こうと思っていたわけです。彼の奥さんのメアリーさんは私の美術の先生だったのですが、「メアリーから、あなたが秋学期からうちの大学に来ると聞いたのだけれども」と言われて、私は「はい、行きます」と答えました。しかし、入学するには申請をしなければなりません、私はそれを全くしておらず、ただ大学に行けばいいのだと思っていました。そのようなことを知らない学生が一体どのぐらいいるのでしょうか。大学に入るには入学許可を取らなければならないことを知らない人がたくさんいて、彼らは大学で何をやるのかという計画もなく、皆さんのようなアカデミック・アドバイザーのオフィスに突然現れて、皆さんに「どうしたらいいのですか」と聞くに違いありません。今もそのような学生がたくさんいます。ここにいる皆さんは違うと思いますが、中にはそのような人も何人かいるかもしれません。私のように何にも知らない人たちがたくさんいます。

学生は一人一人違います。異なる知識と異なる期待値を持っているので、均一的な取り扱いをしてはいけません。アカデミック・アドバイジングは10年前とは全く種類の違う職業だと思ってください。一つの教室にいる学生数はどんどん増えていますし、1人のアドバイザーに対する学生数も増えています。5年前に英国で起こった改革の一つは、1人のチューターまたはファカルティが500人の学生にアドバイスを与えなければならなくなったことです。同時に彼らを教え、そして研究もしなければいけません。授業料は倍になりましたが、学生たちは「いや、もし授業料を倍にするのだったら、もっと良いアカデミック・アドバイジングを受けてしかるべきだ」と主張しました。どれほど複雑な状況になっているのか、お分かりになるかと思います。

世界全体で、学生の修了に関するデータが不完全な状態です。日本では、学生が大学できちんと科目を履修して修了したかということはどうやって測っているのでしょうか。それは恐らくアメリカの測り方と違うと思います。中国とも違うでしょうし、オーストラリアとも違うと思います。恐らく皆さんの中には、履修を完了するというこの

意味が分からない方もいることでしょう。それは卒業式を迎えることかもしれませんし、良い職業に就くのに十分なコースを取れたということかもしれません。世界中で測定方法は全く異なっており、学生が大学の履修科目を全て修了するということの定義も違うと思いますし、測定も難しいのですが、ただ、履修を完了するということがますます重要になっていることだけは確かです。過去に類を見ないほど、政府も、親も、学生も大学を卒業することに重点を置いています。しかし、それをどうやって測定するのかということは分かっていません。

アカデミック・アドバイジングには、学生が大学を修了して成功する鍵となる役割があると考えています。学生たちの成功を担保するための取組の数が、キャンパスの中で増えていると思います。学生を成功させるための取組がキャンパス内外にいろいろありますが、ただ、お互いの結び付きがない状態です。学生をサポートする取組やグループがあまりに多過ぎて、学生はどこに行けばいいのかわからない状態です。私たちは例えばある男性がすごく助けを必要としていると決めて、彼に電話やeメールをしたり、テキストメッセージを送ったりして、彼に対してもっと多くの手助けをしてあげようと思います。一方である若い女性については支援が必要ないと決めて、彼女にはコンタクトを取りません。しかし、実際のところは、男性はもう手助けが必要なくてうんざりしているかもしれませんし、女性は全くコンタクトがなくて非常に不安に思っているかもしれません。このような状態で学生が成功できるかというと、もちろんできません。

では、どうやって現状を変えていきましょうか【スライド②-6】。必要なのは何かを決めるときにデータを基にすること、そして決定事項に対してその効果を確認することです。ただし、最初にどのようなデータを使うのかを決めなくてははいけません。大学においてはしばしば、どのようなデータを使ったらいいのかということについて結論が出ていません。では、何が効果的なのかということはどうやって見分ければいいのでしょうか。

もう一つの問題点は、教育機関の意思決定者とその実行者の間にギャップがあることです。大学のトップが幾ら投資し、どのような技術を導入するかを決めますが、学生と毎日顔を合わせてアドバイスをしている皆さんはそのような重要な意思決定に関与することができません。従って、大学のトップと現場の感覚を合わせていかなければなりません。

それから、学生が大学に入学し、課程を進んで卒業していく中で、学生とのギャップを埋めて全ての課程と一緒に歩んでいかなければなりません。学生の入学について私た

ちは非常に知見があります。オリエンテーションもありますし、1年生のためのプログラムも完備しています。新入生のためのアドバイジングプログラムもあるでしょう。また、学生が大学を卒業するときも、かなりうまくやっていると思います。就職支援をして、大学院への進学もサポートします。社会に出るためのサポートをしています。ただ、大学生活の中でいろいろな課程を進む学生に対するサポートは不十分であると思います。危険度の高い学生について話すのはやめて、学生が直面しているリスク要因にはどのようなものがあるのかということについて、もっと真剣に話をしましょう。1年生が直面しているリスクは、3年生が直面しているリスクと全く違います。2年生と4年生では直面しているリスク要因が異なります。私たちは新入生に対して手厚くサポートする傾向にあります。それが済むと、彼らはそのまま2年生になり、3年生になると思っています。しかし、彼らは2年生になると全く違うリスクを背負っているということを確認しなければいけません。そして3年生になると、また新たなリスク要因が生まれてくるわけです。従って、アカデミック・アドバイジングとは新入生だけに行うものではありません。全ての学生に対して4年間の全課程において行うものです。さらに、アカデミック・アドバイジングとは何かを学生に教えてあげるのも、私たちの仕事です。

## 2. アカデミック・アドバイジングとは

「I ADVISE」というNACADAのポスターがあります【スライド②-7】。私はこのポスターが大好きです。自分の組織のポスターなので好きに決まっていますが、この「I ADVISE」とはどのような意味でしょうか。一つには、問う姿勢・質問を促進するという意味です。学生が私たちのオフィスに入ってきたときに、私たちだけが話をしているのではなくて、学生に話をさせているのでしょうか。学生が質問するように促しているのか、それとも質問を予期して答えを出しているだけなのかということです。

また、学生に対する関与・関わりも意味します。学生の教育に関する意思決定に関わるということです。

それから、批判的な思考をサポートすることを意味します。私たちの仕事は、成功するにはどのコースを取ればいいのかをアドバイスするだけではありません。学生が取ろうと思っているコースに対して、彼らが批判的・客観的な思考をできるように促すことです。そのコースが彼らのキャリアや将来、人生にどのようなインパクトを与えるのかを考えさせるということです。

学生の意欲を高めるという意味でもあります。学生に対して悪いニュースを伝えるのは嫌な仕事ですが、そのときはどうやって学生の意欲を維持していけばいいのでしょうか。また、どうやって動機を維持したらいいのでしょうか。学生が落ち込んだり怒ったりしているときに、皆さんに会うとやる気がかき立てられて、もっと意欲が出てくるということを彼らが分かっているならば、恐らく皆さんのもとに来ると思います。

さらに、夢をかき立てることも意味しています。学生が私たちのもつて来るのは、夢を持ちたいからです。そのようなところがあるとは夢にも思っていなかった場所として、私たちのところに来るのです。その夢をこれまで誰かに話したことがなくても、私たちのところに行けば、その夢をサポートしてもらえると来てくれるのです。

そして、学修を奨励するという事です。アカデミック・アドバイジングとは、コース選択に関してだけのものではありません。それは教えることであり、学ぶことです。ファカルティができることとは全く違う作業であると思います。大学としてアドバイジングのカリキュラムを定義付けているのでしょうか。教えるということの定義はどのようなものなのでしょうか。そして、学修成果というものについて分かっているのでしょうか。アドバイスをする立場として、こういったことは全て理解していなければなりません。それが理解できていなければ、単なるスケジュールを立てる人です。皆さんお分かりだと思いますが、アドバイザーとはそういうものではありません。皆さんが今日ここにいるのはアドバイザーになりたいからであり、単にクレイジーなアメリカ人の話を聞くためではないと思います。

皆さんにぜひやっていただきたいことがあります【スライド②-8】。それは日常的にアカデミック・アドバイジングや学生の成功に関する調査結果を読むことです。NACADAの前プレジデントが書いた論文が「The Journal of General Education」に掲載しているのですが、これはアドバイジングや学生の成功に関するジャーナルではありません。教えることに携わっている方は、ぜひ自分の領域におけるアドバイジングの論文を読んでください。もし論文がなければ、あなた自身が書いてください。前プレジデントは、アカデミック・アドバイジングの目的は全ての学生が道理にかなった、彼らに見合った要求をできるようにすることだと述べました。皆さんの学生は全く道理にかなわない要求を皆さんにしていますか。また、自分自身に対して全く理にかなわない要求を課している学生も大勢いると思います。例えばフルタイムで働くとか、全てのコースを取るとか、あるいは全く勉強しないとか、学生たちは、全く意味を成さない、そして道理にかなわない要求をしがちです。ですから、私たちは学生たちに対して、そ

それは全く理にかなわないことであり、そういうことはできないのだと教えなければいけません。学生たちが人生の目標を立てる上で理にかなった要求をできるようにするということです。私たちの仕事は、学生の目標や情熱、そして学位を定義付けることではありません。学生たちが目標や情熱をいかに自分たちで持ち、定義付けて、それを受け入れるかを教えることです。

### 3. アカデミック・アドバイザーとして学生に教えるべきこと

何をアドバイジングとして学生に教えるのでしょうか【スライド②-9】。まず、学生自身で自らの教育を作り出すということです。それは取らなければいけないコースのチェックボックスにチェックを入れることではありません。

もう一つは、彼らを選んだ道を理解させることです。学生は自身がなぜその専門分野を選んだのかということをもっとよく理解し、大学に入ってきます。例えばエンジニアになりたいと言っても、エンジニアには12種類ぐらいあるということは分かっていません。人の役に立ちたいので看護師になりたいと言いますが、看護師にならなくても人助けはできます。あるいは子どもが好きだから教える仕事に就きたいと言いますが、誰も子どもなど好きではないのです。ただ、孫はかわいいものです。孫のために子どもに我慢するわけです。私が高校の校長をしていたとき、「子どもが好きだから」と言う先生を採用したことはありません。それは夜間学級で教えたことがないからです。したがって、学生に自分がどういう道を選んだのかを理解させる必要があります。仕事で役立つスキル・知識を身に付けさせなければいけません。大学生活の中で学修の文化を創造しなければなりません。それはコンプライアンスの文化を創造することではありません。大学に入って生活するということは、ある種のポリシーや手続きに準拠していつ卒業することだと学生は考えています。大学生活とは、学び、成長し、変化していく過程であることを理解していません。ですから、それを教えなければなりません。

ここにいる方で、大学を卒業して学位を取ったから何かが変わったと思う人はいますか。自分は大卒だからこそ違うことを得たと思っている人はいますか。

**(参加者)** 新しいものの考え方や学習の方法を修得しました。

新しい考え方を大学で学んだということですね。他に大学に行ったから見かけが違う



とか、行動が変わったとか、何かありますか。それこそがやはり学生に教えたことではないでしょうか。大学に入ったら、ただコースを取るのではなくて、本当の教育を受けたと思いたいのではないのでしょうか。そのような経験は皆さんにありますか。

大学に入って学位を取ったら、やはりそれなりに何か違うことを得たと学生が感じられることが重要ではないでしょうか。ずっと前に大学に行った私たちは、そういうことをあまり感じられなかったと思います。しかし、大学にいたときは、やはりそういうことを望んだのではないのでしょうか。それが学生の生活を変えていき、彼らの教育に関与していくことだと私は思うのです。学位を取るには情熱が必要です。仕事を得るために大学に行くわけではありません。今、多くの学生が大学に入るのは就職するためだと考えています。その考え方を变えるのは私たちの仕事であり、そうでなければ、彼らの考え方は変わりません。ですから、彼らにそういうことを教えるような会話を持っていただきたいと思います。もし皆さんが学生に対して、どのようなコースを取るべきなのか、あるいはどこで申請するのかといったことしか話をしていなければ、学生に対して「教育を受ける」とはどういうことなのかを教えていないに等しいわけです。ファカルティとして、また、アカデミック・アドバイザーとして皆さんがやらなければならないのは、教育を受けることの意味を学生に教えることです。

「学修を重視する」とはどういう意味でしょうか【スライド②-10】。学修とは事実ばかりを追っているものなのか、あるいはもっと自由な発想を促進するものなのかという



ことです。学修とは、思想を解放することではないでしょうか。思考法、分析方法、人とのコミュニケーションの方法を学ぶのでしょうか。教育の本質を学んでいるのか、それとも単にテストに合格するためだけのことを学んでいるのでしょうか。その合格するためだけというのが、「トランザクショナルな」ということの意味です。トランザクショナル（業務的）なアドバイジングとは、どのコースを取るのかというアドバイスをするだけです。学生を解放して自由にするアドバイジングとは、学生の人生を変えていくものです。なぜ自分はこれをやりたいのかを学生に自問させる姿勢を育てることであり、専門分野と職業の違いを分からせることです。

自分が取った学位と現在の仕事が一致している方は手を挙げてください。例えばエンジニアリングの学位を取ってエンジニアになった方はいますか。化学の学位を取って化学者になった方、あるいは生物の学位を取って生物学者になった方はいますか。皆さんがそうっていないのに、学生に対して「この職業に就くにはこの専門分野を取りなさい」とアドバイスできるのでしょうか。大学の専門分野が職業に全く結び付かないことを、皆さんは身をもってご存じだと思うのです。今日の学生の多くは、自分の両親が就いた職業が40年前に取った学位とは全く関係ないことを見ているわけです。最近のグローバルなレベルでのデータによれば、2018年に卒業する学生は35歳になるまでに6回も職業を変えることだろうといわれています。ですから、職業と大学の専門分野は全く違うのだということをよく分かっている必要があります。

学生が何を学んでいるのか、どのように学ぶのかを理解しなければいけません。大学に入学したとき、学生は勉強の仕方を知りません。皆さんは学生たちと色々な話をするとと思いますが、「次はもっと一生懸命やります」と言いながら、もっと一生懸命やるということの意味が分かってない学生がほとんどではないでしょうか。学生たちにその意味を聞いても、多分、答えられないと思います。ある学生にとって、もっと一生懸命勉強するということは本を買うという意味かもしれません。あるいは、次回からきちんと授業に出るということかもしれません。ですから、勉強の仕方を教えなければならぬのです。

大学生活を送る中で、その学修をどうやって応用していくのかということも学ばなければなりません。例えばテストで大失敗をしてしまったとして、なぜ大失敗したのかということが分からないと、次回に良い点数は取れません。また、より重要なのは、テストで大成功したら、どうしてそれがうまくいったのかを理解し、その成功体験を次回にも応用できることです。私が英語を教えていた当時は全く合格できない学生だけと会う

ていて、Aを取った学生と話をすることは全く考えませんでした。学生になぜAを取れたのかを説明してもらったことはなかったのですが、学生はどうやって勉強したらいいのかを分かっていないことから、例えば英語でAが取れたら、それはどうやって勉強したのかという話をし、そのやり方を数学や科学に応用すれば、全てAを取れるわけです。アドバイザーとしてはそのような質問をして、学生たちに自分で学ばせなければいけません。また、現在学んでいることを将来にどうやって役立てるのかということも考えさせなければいけません。

私のお気に入りのポスターがあります【スライド②-11】。これは忘れがちなことを思い出させてくれます。「WE ADVISE. YOU DECIDE. (私たちがアドバイスし、学生が決める)」と書かれたポスターです。学生たちは私たちに彼らのための意思決定をしてほしいと思っています。私たちが学生のことを決めるのではなくて、学生たちにどうやって決めるかを教え、必要な意思決定ができるようにアドバイスするのが私たちの仕事です。もし彼らが私たちの言ったとおりに意思決定をして成功しなかったら、それは誰のせいでしょうか。私たちのせいです。私たちは学生たちに、何かを決めるときはそれが彼らの決定であることを分からせなければいけません。意思決定の仕方を教えるのです。学生たちに対して、どのコースを取るか、どの専門分野を専攻するか、いつ学校に行くかといったことを決めるやり方を教えなければいけません。学生たちはそれを嫌がるかもしれません。学生たちは両親に決めてほしがって、両親の言うとおりにします。そして、私たちに同意してほしいと思っている学生がたくさんいます。私はそのような学生に対して、「人生は厳しいのだ。甘く見てはいけない」と言っています。人生の中でいつか自分で決めなければならない日が来るから、今日からやりなさいとアドバイスしています。

学生はどのようなアドバイジングを受けるに値するのでしょうか【スライド②-12】。彼らは次に述べる三つのことについて、非常に質の高いアドバイジングを受ける資格があると私は思っています。一つ目は情報のガイダンスです。私たちがアドバイザーとしてきちんと必要な情報を分かっているのでしょうか。二つ目として、学生は知的な助言・指導を受けるに値すると思います。学生はコースや専門分野、彼らが欲しいもの、夢について助言を欲しがっています。三つ目として、学生は発展的な関係を構築したいと思っているわけです。すなわち、学生が私たちに期待していることは、私たちが学生に思い入れを持っているかどうか、プロとしての知識があるかどうか、常に学生のためにそこにいるかどうかです。もし私たちが学生の立場に立って思いやりを持っていなければ

ば、残りの二つはもう意味を成さなくなってしまう。私たちが思いやりを持って彼らの立場に立っているということを学生が分からないと、彼らは全く聞く耳を持たなくなってしまうと思います。もしアカデミック・アドバイザーがそういうことをできなければ、別の道を選んでしまうと思います。

ここで警告を発したいのは、ジェネレーションZといわれる学生です。このジェネレーションZといわれる世代の学生にとって、アカデミック・アドバイザーにいつもアクセスできるということは24時間365日を意味します。私たちが学生から夜中にeメールを受け取ったら、やってはいけない最悪のことは何でしょうか。それは返事をする事です。返事をしてしまうと、学生たちは「このアドバイザーは24時間いつでもメールに答えてくれる」と思ってしまいます。そして、このアドバイザーはいつでもメールに答えてくれるといううわさを友人に流します。「私のアドバイザーは全く眠らないから、いつeメールを送っても返事がもらえるよ」ということになってしまいます。学生に対して、アドバイザーは大学のATMではないということを教えなければなりません。ATMのカードとIDナンバーを入れると、24時間お金が引き出せるかのように学位が取得できるというのは、大学ではありません。アドバイザーの仕事は、学生の責任が何であるかを教えることです。学生の成功をアカデミック・アドバイジングの成功の尺度に入れるのをやめなければいけません。それは学生に対していつでもアカデミック・アドバイザーを使えると教えることではないのです。大学生活、人生は厳しいものです。困難もたくさんあります。例えば8時に起きて、授業に出なければいけません。アドバイジングとは学生の満足度を上げるためのものではありません。もちろん学生の幸せは私たちの仕事にとって重要なことですが、アカデミック・アドバイジングの学生とアドバイザーの関係において、学修ということを学生に学ばせなければいけません。

#### 4. 大学におけるアカデミック・アドバイザーの在り方

今、私がお話したことを説明していきたいと思います。情熱を持ったやる気満々のアドバイザーとして、大学におけるアカデミック・アドバイジングのコミュニティはどうあるべきなのでしょう【スライド②-14】。まず、大学について明確な定義を持たなければいけません。それは学生の成功や持続的な大学への参加を担保するという事です。そのような定義付けについてアドバイザーと話し合いをしている大学は少ないです。今、私はこの部屋で皆さんの間を歩いていますが、恐らく皆さんからは学生の成功

やアカデミック・アドバイジングの成功について60の異なる定義を聞くことになると思います。大学の中で成功の定義が決まっていないのに、どうしてアカデミック・アドバイジングが成功するのでしょうか。ですから、そのようなことを考えて、議論していかねばなりません。ここにいる皆さんはその取組のリーダーです。皆さんの肩書きは誰でもよくて、それが学部長であろうと、学長であろうと、総長であろうと、教員であろうと、アドバイザーであろうと関係ありません。隣に座っている人に対して自分の成功の定義が語れるのであれば、一緒に仕事をする事ができると思います。これまでと全く違う高等教育をつくっていくためには、そのような定義をきちんと持って、そのような議論をしていかなければいけません。

大学において、戦略的なパートナーシップを構築していかなければなりません。ファカルティ、職員、管理者のパートナーシップが非常に重要です。関係者が同じ考えを持っている必要があります。

大学の中でキープレーヤーを見つけて、彼らをこの中に取り込んでいかなければいけません。キープレーヤーは偉い人ばかりではありません。多くの場合、実際にいろいろなことを知っていて、現場のこともよく分かっているのは秘書やアシスタントの人たちです。そのように現場を最もよく知っていて包括的な視点を持っている人が学生の成功に関する会話に入っていないことが多いのですが、学生が頼って話をしに行くのはそのような秘書やアシスタントの人たちです。彼らはいつもそこにいるからです。ですから、偉い人たちと現場のことをよく知っており、学生との関わりの深い人たちがパートナーシップを組むことが重要です。

権威があって、コミュニケーションを促進するような計画を立てるリーダーシップが必要です。世界中のほとんどの大学において、アカデミック・アドバイザーとアカデミック・アドバイジングの管理職には多くの責任分野がありますが、権限を持っていないことが多いです。それを変えていきたいと思います。議論すべきことをきちんと認識しなければなりません。

この分野の文献や研究成果などをぜひ研究して、調査・分析をしてもらいたいと思います【スライド②-15】。こちらの先生が日本で本当に先進的な本を出されていますが、このような最先端の研究を熟知しないと、現場でどのような変化が起きているのかは全く分からないと思います。また、何をしなければいけないかという、その期待値も分からないと思います。

例えば、ここの4人で新しい部署ができたとします。彼がチェアです。新しい肩書き

を得て、年収が100万円増えるとしましょう。100万円がどのぐらいの額なのか、私は全く分かっていないのですけれども。そして、彼女はリーダーとしてアカデミック・アドバイジングや学生の成功に関する先進的な記事を探し、全員にそれを読んでもらわなければいけません。その部署の集まりの最初の20分間は、必ずその記事について語ると決めることが重要です。そして、次の週は別の人にどの記事について話し合うかを決めてもらいます。その次の週はまた別の人が、さらに次の週はまた別の人が記事を選ぶわけです。これをやることによって文化ができてきます。学生の成功、学生が卒業するまで大学からドロップアウトしないような永続性、それからアカデミック・アドバイジングについて常に話し合い、それに関する研究成果を共有することによって、それが重要であるという文化が部署の中にできてくるということです。学生の成功とは何か、どうやって成功させるのかということをお私たちが理解しなければ、学生を成功させることはできません。

この分野の研究には積極的に参加していかなければなりません。もし成功体験があったら、ぜひそれについて書いていただきたいのです。NACADAはアカデミック・アドバイジングのセンターを設立しましたが、それは世界で唯一のものであります。そして、新しいプログラムを立ち上げ、新しい研究分野に関する出版も始めます。2月からオンラインジャーナルを始めます。

過去5年間での学生との関わりにおいて何か誇りに思うことができた人は手を挙げてください。皆さん、どうして手を挙げないのでしょうか。ぜひ手を挙げてください。それは皆さんの仕事ですよね。では、それについてぜひ書いてください。可能であれば、出版してください。それほど難しいことはありません。私にメールで送っていただければ、私が出版します。信頼していただいて構いません。仕事を皆さんにアサインします。ボランティアの仕事もアサインして、それを出版したいと思います。そこで重要なのは、皆さんが高等教育を変えていこうという意志と情熱を持っていることです。私は常に言っているのですが、大学を変えるよりも墓地を変える方が簡単です。大学のポリシーを変えるよりも、死人が起き上がって動く方が早いのです。皆さんの中に恐らく原理原則やポリシーがあると思いますが、それがいつできて、どのようなもので、なぜそこにあるのかを知っている人は手を挙げてください。それは既にリタイアしてしまった、あなたの知らない人たちが25年前に作ったものであるにもかかわらず、今でもそれに縛られて準拠していませんか。大学の役割とは何かをしっかりと意識すれば、それを変えていこうという意志が生まれてくるはずですよ。学生の成功を最優先事項としましょ

う。そして、学生の成功が最優先事項であるということをぜひ書いてください。それから、学生の成功が最優先事項であるということを共有しましょう。

NACADAのウェブサイトに行ってみてください。そこには学生の成功に関して5,000もの記事があります。その中から1週間に一つ選んで、皆さんの部署に送ってみてください。1週目はみんな削除してしまうと思いますが、2週目には数人がそれを開き、3週目には読んでくれると思います。そして、5週目にはそれについて話が始まります。それによって学内の文化が変わってきます。私にその力があると言わないでください。皆さんがその力を持っているのです。それを信じていなければ、今日ここに来ていないと思います。

われわれのディシプリン、アドバイス、スキル、期待について話をしましょう。それは贅沢なことではありません。今、ここに皆さんがいるのはボーナスのようなものだと思います。そうでなければ、皆さんはここにいないと思うのです。ボーナスとは、普通では手に入らないものという意味です。例えば2月10日にアカデミック・アドバイジングのサロンが開かれます。これをボーナスにしないで、日常業務にしたいと思います。アカデミック・アドバイジングについて、常に皆さんが集まって話をできるような文化を創りましょう。年に1~2回だけ話し合うのではなくて、毎日の会話にしましょう。

とても重要な問題について分析するとき、データを使わなければなりません。学生を理解するために、どのようなデータが必要でしょうか。学生はどのような人ですか。どのような人が最も助けを必要としているのでしょうか。また、どのような人が最も助けを必要としないのでしょうか。それを定義付けるようなデータとしては何を使ったらいいでしょうか。実は、ほとんどの大学は学生を理解していません。ですから、それをもっと掘り下げていかなければなりません。ある種の学生に対して影響を与えるリスク要因を理解する必要があります。そして、大学にあるポリシーや手続きが学生の成功に良い影響を与えるのか、あるいは学生の成功に実は悪い影響を与えるのかということを理解しなければいけません。この大学のプログラム、または学部の中で、学生に対して積極的にプラスの影響を与えているものがあれば、一つの学部だけでそれを終わらせるのではなくて、大学全体で共有しましょう。必要な助けを一部の学生だけが受けているようではいけません。また、もし悪い影響を与えているポリシーや手続きがあったとしたら、なぜそれらをそのまま維持する必要があるのでしょうか。

手を挙げていただきたいのですが、そういうものはないのでしょうか。皆さんの大学の中で、学生に悪い影響を与えている手続きやポリシーが恐らくあるのではないでしょう

か。皆さん、頷いていらっしゃるんですね。私はそういうものを解決していきたいと思っているわけです。もし悪い影響があるなら、なぜそのポリシーを維持しているのでしょうか。それを変えていかなければいけません。それが私たちの仕事だと思います。アカデミック・アドバイジングは学生たちの人生、学問の道筋の開発に関わっていかなければなりません。カリキュラムやプログラムが変わるのであれば、それをフォローしていく必要があります。学生が私たちに会いに来て、私たちが「XとYとZをしなればなりませんよ」と言ったら、学生が「そのポリシーは変わりましたよ」と言ったとします。ポリシーが変わったことは、恐らく皆さんよりも学生の方が早く分かっていると思うのです。アカデミック・アドバイザーとしては、プログラムやコースがどのように変わったのかをいち早く理解していなければなりません。千葉大学でもこのようなプロセスがあると思います。千葉大学ではいち早くそういった測定のメソッドを導入したと聞きましたが、もしそのようなものがなければ、アカデミック・アドバイジングに関する学生の学修成果を開発することが必要だと思っています。

学生がアカデミック・アドバイザーと話をして得られる結果とはどのようなものなのでしょうか【スライド②-16】。学生がその会話から得るものは、来年度のコースは何を取ったらいいのかということだけでしょうか。それとも、この会話から学生が高等教育や人生の価値・目的などを見つけられるようになるのでしょうか。教えること、それから学修することにはいろいろな意味があるわけです。学生たちが、毎年、様々な学修成果をアカデミック・アドバイジングから得られるような活動をしていきたいと思えます。1年生のときには全く夢にも思わなかったような成功の道に導いていくことができます。今、オリエンテーションでは、残念ながらこの学生たちに今後会わないと思うことから、今後の大学生活で必要な「これとこれをやればいいのだ」という非常に雑ばくな話しかできていないと思っています。4年生になると、1年生のときに教わったことなど忘れてしまうと思います。ですから、この4年間において学生たちに常に関わっていてもらいたいと思うのです。

## 5. おわりに

今日の最後のポスターをご覧ください【スライド②-17】。このようなことを本当にあなたの学生たちに言えるでしょうか。学生たちが皆さんのオフィスに入ってきたとき、まず彼らは尊敬されているでしょうか。どのようにそれが分かりますか。どのよう



な証拠を持っていますか。どのようなデータをもってそれを証明しますか。学生は尊重されていると感じていると、皆さんが思っているだけかもしれません。学生たちは価値を認められていると思っているのでしょうか。

皆さんは学生を人間として、その価値をきちんと認めていますか。それとも、ただの数字としか見ていないのでしょうか。例えば大学から学生がいなくなったとして、誰もそれに気付かなければ、それこそ学生が人間としてその価値を認められていないということではないのでしょうか。もし学生がいなくなったらすぐに分かるというのが、学生がその価値を認められているということだと思のです。

学生たちは意見をきちんと聞いてもらっているのでしょうか。「聴く」と「聞こえる」は違います。ボディランゲージもその一部です。学生が皆さんと話をしているのに、スマホをずっといじっていませんか。学生が話しているときに、スマホに届いたメールを開いていないでしょうね。皆さんは「いや、私はメールなど見ていません」と言うかもしれません。学生はそんなことに気付いていないと言うかもしれません、学生の立場に立つと、自分が話しているときにスマホがアドバイザーのそばにあって、そこにメールが来るということ自体があってはならないことです。コンピューターもスマホもオフにして、スマホは机に裏返して置いた方がいいと思います。簡単なことですが、それだけで私たちが学生に集中していることを彼らに分かってもらえると思います。

最後は、学生に自分が重要だと思われるかどうかです。皆さんの大学で、学生は自分に意味があると思っているのでしょうか。今、私がキャンパスを歩いて20人の学生に会い、彼らに「どこから来たの？」などと聞きながら、「皆さんは千葉大学にとって意味があると思いますか」と尋ねたとしたら、その20人のうち何人が「はい、私は千葉大学にとって意味のある人間です」と答えるのでしょうか。また、何人が「千葉大学にとって何の意味もない人間です」と答えるのでしょうか。そして、何人が「何の話をしているのですか」と言うのでしょうか。学生とそのような話をさせていただきたいのです。学生が自分は大学にとって意味がある、大学に自分の居場所があると思っていたら、きっと大学を卒業できます。少人数でしょうけれども、大学に居場所がないと思っていたら、その学生は駄目です。恐らく今の質問は大多数の学生にとって意味の分からないもので、なぜそのようなことを考えるのかと思うかもしれません。しかし、それが分からない、あるいは居場所がないと思うと、恐らく大学で成功できません。

私はある日の午後、ジーンズとスウェットシャツを着て、あるオランダの大学のキャンパスを歩いていました。私は年寄りですから、学生はとても親切にしてくれるので

す。私はオランダの大学で道に迷った老人の役を演じながら、学生たちになぜこの大学を選んだのかと尋ねました。そうすると、100%の学生が「この大学に足を踏み入れた瞬間に、家にいるかのように思った」と答えました。そのようなことは一夜にして達成できるものではありませんし、一人、あるいは一つのプログラムでできるものでもありません。それは大学の文化が変わったから、学生全員が自分の居場所を大学で見つけることができ、家にいるような気がすると言ったのです。

皆さんも自分の大学の学生に対して、大学にずっといてほしい、または大学を家のように感じてほしいと思いませんか。それは可能です。皆さんは学生のことを思いやっていますし、知性もあります。そして、皆さんはアカデミック・アドバイザーですから、それができると思います。ご清聴ありがとうございました。(拍手)

本日通訳してくれた大竹さんに盛大な拍手をお願いします。(拍手)

## 6. 質疑応答

(司会・竹内) たくさんのご質問があるのではないかと思います。私はお話を聞いていて、圧倒される思いでした。ぜひご質問をお願いしたいと思います。1点だけ、あらかじめお断りさせていただきます。今回のシンポジウムについてはブックレットを作成する予定があります。その中にパネルディスカッションや質疑も収録させていただくので



すが、そこにご発言者のお名前が載ることになると思います。大変恐縮ですが、ご了解ください。

**(鳥居)** 今日はどうもありがとうございました。桜美林大学の職員の鳥居と申します。私の古い経験なのですが、今から14年ぐらい前にアメリカに滞在していたことがあり、当時、アメリカの大学のアドバイザーと高校のアドバイザーにそれぞれインタビューしたことがあります。ただ、大学のアドバイザーと高校のアドバイザーの違いが今でもよく分からなくて、高校でアドバイスを受けてきた学生が大学に入っているわけですが、そのような経験をした学生が先生の言うように本当に路頭に迷っているのだろうかという疑問を持っています。

**(ナット)** アメリカの高校のカウンセラーとアドバイザー、それから大学のアカデミック・アドバイザーとカウンセラーの役割の違いを聞きたいということでしょうか。

**(鳥居)** それもありますが、基本的に日本と違ってアメリカの学生は高校時代からカウンセラーにアドバイスを受けているわけですね。

**(ナット)** アメリカの高校生は定期的にかウンセラーからアドバイスを受けているわけではありません。15年ぐらい前まではそうだったのですが、今はそういうことはありません。高校のカウンセラーは学習障害や身体的な障害などがある人たちのテスト、カウンセリングが主になっています。ですから、大学に関するアドバイジングを受けるのはトップの高校の生徒たちです。それはトップの生徒やその親たちが非常に強く要求するからです。アメリカの現状では、普通の高校生はアカデミック・アドバイジング、または大学に関するアドバイジングを高校で受けられません。これまでとは状況が完全に変わってしまったのです。全く違うニーズになっています。

**(鳥居)** 当時、たまたま私の娘を現地校に入れていて、いろいろなインタビューをさせてもらったのですが、そのような印象があったのです。

**(ナット)** おっしゃるとおりです。15年前はそのとおりだったのです。しかし、連邦法が変わったこともあって、高校でのカウンセラーの役割は全く変わってしまいました。ですから、先ほどお話ししたように、特に高校から大学に入ったばかりの1年生に対するアカデミック・アドバイジングが非常に重要なのです。

**(鳥居)** そのような昔のイメージがあったものですから、イメージが湧かなくて質問しました。ありがとうございました。

**(ナット)** 10年前と今を比べると、高等教育におけるアカデミック・アドバイジングの役割というのは本当に変化が大きいところです。

素晴らしい質問です。私は今、いろいろな国に行って同じような話をしているのですが、そうするとアメリカも世界のその他の国も同じような状況にあることが分かっています。ただ、日本の状況はお答えができません。正直に申し上げて、あまりよく知りません。話を作ることはできますけれども。

**(司会・竹内)** ありがとうございました。他にご質問はありませんか。

**(井上)** 金沢大学の井上と申します。お話をありがとうございました。ジェネレーションZのお話について、具体的にどのようにアドバイザーのアドバイジングが変わったのか、例があれば教えてください。

**(ナット)** ご質問ありがとうございます。まず、アドバイザーにもさまざまな世代のアドバイザーがいます。例えば私のようなベビーブーマー、それから朝鮮戦争の子どもたちなどです。ジェネレーションA、B、Cと、いろいろなジェネレーションの人がいるわけです。ですから、アドバイザーにもいろいろいますし、また、学生にもいろいろなジェネレーションの人がいます。ジェネレーションZのエキスパートによると、ジェネレーションZとはテクノロジーが全ての問題を解決すると思っていて、しかも解決しないということも急速に学ぶ人々です。

さらに悪いのは、高等教育において技術が全ての問題を解決するわけではありません。私たちは高度なテクノロジーだと思っているものに何百万ドルもかけて、学生を成功に導こうとしています。私の顔を見てください。コンピューターは決して皆さんの代



わりにはなりません。学生の成功を決めるのは、学生との関係構築です。テクノロジーがそれを助けてくれるかもしれません。例えば、私は学位のオーディットに関する全ての質問に答えられるわけではありません。技術がそれを助けてくれるわけです。ですから、ジェネレーションZとの会話においては、技術をよく分かっていることが非常にパワフルな会話の助けになりますし、また、レベルが上がっていきます。

**(司会・竹内)** ありがとうございます。他にフロアからご質問はございませんでしょうか。

**(清水)** 追手門学院大学の清水と申します。先ほど戦略的なパートナーシップを結ぶことが重要だというお話がありましたが、実は私が今日の午前中のクローズドセッションでお話した調査の中で、アンケートに答えてくれた組織の課題の一つとして、学内の他部署との協働や教員との協働がなかなかうまくいかないということが挙げられていたのです。先ほどキープレイヤーを見つけるとおっしゃったのですが、具体的な成功事例をご紹介いただければと思います。

**(ナット)** 幾つかの成功事例はあります。最初にやらなければいけないのは、協働とパートナーシップを定義付けることです。自分のオフィスにいたのでは何も起こりません。実際に立ち上がって、同僚や他学部を訪問して話をしていかなければなりません。誰と話をしなければいけないのかを理解する必要があります。多くの場合、大学は大きいので、誰と話をしているのかということすら分かりません。ですから、大学のファカルティやスタッフ、管理者をみんな集めて、定期的に話をする機会を意識的に設けることが重要です。重要な問題やトピック、質問について議論します。今週はX、来週はYという形で、毎週異なるトピックを選んで学部や役割を超えた議論をする文化をつくっていくことが重要だと思います。

学位を取るためのやる気について、NACADAとTyton Partnersが研究・調査結果を発表しています。この結果はNACADAのウェブサイトに掲載しています。過去3年間において、学生の成功の鍵というのは、意識的にキャンパスの中で異なる学部の人たちがコラボレーションするような関係を構築することであるという結果が出ています。どのように状況を改善していったら、学生を成功に導いたのかという研究結果をぜひ読んでみてください。そして、その経験を皆さんのキャンパスの中でも実践してみてください。

学生が皆さんと話すときは、何となくうまくいっているようなことを言うわけです。皆さんが「何か私が役に立てることはありますか」と聞くと、学生は「よく分かりませ

ん」と答えます。「何が必要ですか」、あるいは「何についての質問ですか」と聞いても、やはり「分かりません」と答えます。それで、最後に「誰があなたに対して私に会いに来るように言ったのですか」と尋ねると、恐らく学生たちはみんな同じように「あの女の人」と言うと思います。どの大学にも「あのお姉さん」という方がいますよね。これはお互いを知っていないからです。ですから、学生は「チャーリー・ナット先生に言われたので、アカデミック・アドバイザーに会いに来ました」ときちんと言えないのです。

学生にアドバイザーに会いに行くように言ったときは、ぜひ名刺をあげてください。そうすることによって学生はあなたの名前が分かりますし、会いに行かせたアドバイザーと皆さんの間にもコネクションができます。それが「意図的な」ということの意味です。全ての人がそれをやらなければなりません。それこそがキャンパスの中で求められていることだと思うのです。


どうでしょう、それで意味を成すでしょうか。今ご紹介したのは過去3年間の研究結果で、とても面白くて興味深いものですから、ぜひチェックしてみてください。

皆さんに感謝したいと思います。世界中で講義をしてきましたが、皆さんのように親切で、心が広くて寛容で、辛抱強い聴衆には初めて会いました。ありがとうございます。(拍手)

**(司会・竹内)** ありがとうございます。少し早めですが、今日はこれで終わりにさせていただきます。改めて、本日長時間にわたって講師を務めてくださったチャーリー・ナット先生と、素晴らしい通訳をくださった大竹さんに拍手で心より感謝を示したいと思います。ありがとうございます。(拍手)

スライド資料②

〔スライド②-1〕



**NACADA Executive Office**  
Kansas State University  
2323 Anderson Ave, Suite 225  
Manhattan, KS 66502-2912  
Phone: (785) 532-5717  
Fax: (785) 532-7732  
e-mail: nacada@ksu.edu


© 2017 NACADA: The Global Community for Academic Advising

The contents of all material in this presentation are copyrighted by NACADA: The Global Community for Academic Advising, unless otherwise indicated. Copyright is not claimed as to any part of an original work prepared by a U.S. or state government officer or employee as part of that person's official duties. All rights are reserved by NACADA, and content may not be reproduced, downloaded, disseminated, published, or transferred in any form or by any means, except with the prior written permission of NACADA, or as indicated below. Members of NACADA may download pages or other content for their own use, consistent with the mission and purpose of NACADA. However, no part of such content may be otherwise or subsequently be reproduced, downloaded, disseminated, published, or transferred, in any form or by any means, except with the prior written permission of, and with express attribution to NACADA. Copyright infringement is a violation of federal law and is subject to criminal and civil penalties. NACADA and NACADA: The Global Community for Academic Advising are service marks of the NACADA: The Global Community for Academic Advising.

# Theory and Practice in Academic Advising in the United States: Role Of NACADA

Charlie L. Nutt, Ed.D.  
NACADA Executive Director  
Kansas State University


〔スライド②-2〕



# We are all faced with a series of great opportunities – brilliantly disguised as unsolvable problems.

(John W. Gardner, Secretary of Health, Education, and Welfare, 1964)


[スライド②-3]



## The Professionalization of Academic Advising: Where Are We in 2010?

- *Leigh S. Shaffer, West Chester University*
- *Jacqueline M. Zalewski, West Chester University*
  - *John Leveille, West Chester University*
- **NACADA Journal Volume 30(1) Spring 2010**

[スライド②-4]




## STUDENTS – AND THEIR SUCCESS IN ACHIEVING

**Academic Goals**  
**Career Goals**  
**Life Goals**  
**Dreams and Passions**

**ARE IMPORTANT AND WHY WE DO WHAT WE DO!**




〔スライド②-5〕



## Complexities Facing Higher Education Today

- Mission Shift and/or Change
- Shifting Student Demographics
- Rapidly increasing Classroom-Student and Advising-Student Ratios
- Incomplete data on student completion but increased focus on student completion
- Rapidly increasing number of student success initiatives without the campus community involvement or understanding – and with little connection to each other

〔スライド②-6〕



## Complexities Facing Higher Education Today

- Utilization of data to make decisions and to assess the effectiveness of decisions
- Growing distance between institutional decision makers and those at the ground level implementation
- Building bridges as students arrive, move through, and leave the institution

〔スライド②-7〕



〔スライド②-8〕


**NACADA**

In his recent work “Academic Advising In Higher Education: A Place at the Core” (2015), Eric White, former President of NACADA:

“the purposes of academic advising accommodate all students so that they can make reasoned demands as they set and enact the goals of their lives”p. 270

*The Journal of General Education: A Curriculum Commons of the Humanities and Sciences, 2015*


〔スライド②-9〕



**Advising Relationships Teach Students to:**

- Craft their own education
- Understand the path they have chosen
- Use the skills and knowledge in work
- Create a culture of learning around their undergraduate experience
- Engage in their education, transforming the educational experience to reach passions – not just jobs

〔スライド②-10〕



**Being Learning Focused Involves Understanding**

- Is the learning liberating or transactional?
- What the student is learning
- How is the student learning?
- Is he/she applying his/her learning
- How the current learning positions the student for future learning?

〔スライド②-11〕



〔スライド②-12〕


**NACADA**

Principles for Advising : What Students Deserve

- Informational Guidance
- Intellectual Mentorship
- Developmental Relationships

Brett McFarlane, Ed.D – Executive Director of Academic Advising UC Davis

〔スライド②-13〕




## Academic Advising Core Competencies and Core Values

<http://www.nacada.ksu.edu/Portals/0/Resources/documents/Core%20Competencies%20BASIC%20Flyer%20%28update%205-10-17%29.pdf>

<http://www.nacada.ksu.edu/Portals/0/Resources/Pillars/Core%20Values%20Handout.pdf>

〔スライド②-14〕



## What Academic Advising Communities Must Do To Demonstrate our Passions

- Develop definitions for student success, retention, and persistence at the institutional, system, and state.
- Develop strategic collaborative partnerships across the state. The partnerships between faculty and primary advisors/counselors are critical
- Identify the key players you must have involved in any initiative development, implementation, and support.
- Develop a plan for leadership which has authority and a communication plan that crosses all systems in the state.

〔スライド②-15〕

**○NACADA**

- Investigate, study, and analyze the literature and research in retention and persistence
- Take an active participatory role in the scholarly inquiry of our field – research, analysis, and publication – **The NACADA Center for Research. The NACADA Review** – new on-line advising publication focusing directly on theory and practice
- Make the discussion of our discipline, skills, and strategies an expectation and a requirement on our campuses – not a luxury
- Utilize data to analyze the key issues:
  - Populations which are need in support or assistance
  - Risk factors affecting populations
  - What institution, system, and states are or are not doing that negatively or positively affects student retention and persistence

〔スライド②-16〕

**○NACADA**

- Academic Advising Communities must be actively involved in the development of “student pathways” and all completion initiatives across the institution
- Academic Advising must be clearly tied to the student pathways to success and completion
- Student Learning Outcomes must be developed for the academic advising experiences of all students
- Student Learning Outcomes must be sequential for student completion

【スライド②-17】



# **Theory and Practice in Academic Advising in the United States: Role of NACADA**

**Dr. Charlie Nutt**

Executive Director of NACADA (National Academic Advising Association)

※チャーリー・ナット氏の講演は英語（逐次通訳あり）で行われました。  
参考資料はその音声をできるだけ忠実に起こしたものです。



# Theory and Practice in Academic Advising in the United States: Role of NACADA

Executive Director of NACADA  
(National Academic Advising Association)  
Dr. Charlie Nutt

Good afternoon. Thank you so much for the opportunity to be here and to be a part of this event. I am very excited. I would like to take just a moment and really congratulate Chiba University on the work that they are doing.

I am very impressed with the rubric that they have put together. One of the benefits and one of the beauties of NACADA is that we constantly share with each other and we constantly encourage each other to take information back home and use it and to take information back home and share with others as long as we make sure and give credit for that. I will just openly say I am taking this stuff home because it is very impressive. The rubric that you have put together for those competencies is really far beyond anything I have seen, so I am very-very impressed and looking forward to that.

I am looking forward to being a part with you today and going to talk about advising from a standpoint of what is advising, what is the theory, what is the practice, how does it relate in many ways to what happens in the US as well as what happens in Japan and then put the world of advising across the world.

Let us give her a round of applause because she has to try to translate South Georgia accent to Japanese. I am going to try to figure how she translates “ya’ll”.

I love this quote because I think it really does describe what a higher education is all about. It was done way back in 1964 by the Secretary of Health, Education and Welfare in the United States and he said, “We are all faced with a series of great opportunities brilliantly disguised as unsolvable problems.” Nowhere other than the higher education today are there more problems. Across the world with budgets, with financial problems, with decreasing student sizes, with increasing student loads. We have one thing we can do. We can either focus on solutions and the opportunities we have to improve, or we can sit back and do nothing and watch our students not be successful. I believe you all are here today because you have a desire to see your students be successful. Therefore, we are going to look at opportunities for improvements.

This is a great article that I encourage you to look at and read when you have a chance. It is called ‘The Professionalization of Academic Advising: Where are we in 2010.’ You can find it in the NACADA journal and the citation is there. Some of the conclusions these authors came up with are things that we need to think about today. I am going to talk about doing this

presentation and those are increase in the knowledge and the theory of academic advising, increase in research and the understanding of research to drive improvements in academic advising and then to follow the model of Chiba University and that is to begin to measure the effectiveness of academic advising and its impact on students.

Students and their success in achieving lots of things are what we are all about. For example, the things are Academic goals, career goals, life goals and their dreams and passions. That is so much more than just selecting courses for students. If we think of academic advising as an activity that improves student success, then we have to begin to recognize that what we do is important and why we do it is important. Now you in this room know how important it is. The key is how do you go back and communicate that to your colleagues, to your administrators and to your students and that is part of our job.

What are the complexities that face higher education today that makes student success so much different than in the past? First of all, we see a severe mission shift or change in the missions of universities. We see this across the globe. Here in Japan, you are seeing less 2-year schools. In the United Kingdom, you are seeing a total shift in the world of faculty. In the United States, you are seeing schools moved from being 2-year to 4-year to university as well as a massive increase of online institutions that are very different than anything we have ever seen before. All of those mission changes impact students and academic advising we provide them.

We see shift in student demographics. Our students today are not the same as they were a decade ago or even 5 years ago. Across the globe, the largest growing population of students in college are the first-generation students. Those are the students whose parents, brothers, sisters never went to college. They are the first people in their family to attend college.

I was the first-generation student. I have an older brother who never went to college and a sister who went to college after she was married and had children. I was told my entire life “you are going to college.” I guess I was supposed to be the savior. I graduated from high school in a little pretty town of Southeast Georgia in the United States and went directly to work in a factory. In August, the phone rang one day in the factory and I answered the phone and said, “Good afternoon. May I help you?” Then the voice on the other end said, “May I speak to Charlie Nutt?” being a good English major I knew the right pronoun to use so I said, “This is he.” The voice said, “Charlie, this is Fred Griffith.” He was the registrar at our local community college while I was going to go to college. He said, “Mary” his wife who was my art teacher “tells me you are coming to school this fall” and I said “Yes, Sir.” He said, “You might want to apply.” I had never applied. It was just called show up. How many of your students just show up? They have no idea why. They have no idea what they plan to do with college and they walk into your offices for you to solve all their problems. Those are the students we have today. They are not you. Now there are a couple of you that might be, but the rest of you or me, they are not us.

We have to treat them differently and academic advising is a totally different animal than it was in the past. We are seeing rapidly increasing student ratio in classrooms and student ratio in advising. Part of the revolution in the United Kingdom 5 years ago was that personal tutors or faculty were being expected to advice up to 500 students as well as teach and research. They

had doubled student tuition and the students said, "No. If we are going to pay double tuition we want better advising." We see that complexity.

We have incomplete data on student completion across the globe. How you measure student completion in Japan is totally different than the United States and it is also totally different than China and Australia. Some of you are looking at me as if you are not even sure what I mean by student completion because it could mean graduation, or it could mean I took enough courses to get a good job. With all this incomplete data, it becomes very difficult to truly measure what student completion is, but yet we are being focused more on student completion across the globe. Governments across the world, parents across the world and students across the world are expecting more people to graduate than ever before, but if we are not even sure what that looks like how we measure it.

Academic advising is key to that student completion of success and then we see a rapidly increasing set of student's success initiatives across our campuses that are not connected to each other or not connected to other parts of the campus so that students do not understand where they are supposed to go to get help from whom because there are so many places. We make decisions such as we say this young man needs lots of help, so everyone is calling him, emailing him, texting him, requiring him to come get extra help. We also decide this young lady does not need any help and no one ever contacts her. As a result, he is sick of us and she is scared of us. Does that make student success? Of course not.

How do we change that? We have got to realize that we have to use data to make decisions and to measure the effectiveness of decisions, but we have to decide what that data is and on many campuses there has been no conclusion about what data we need. How do we know what is effective?

There is a growing distance between those who make decisions and those who do the work. People at the top of the university are deciding how to spend the money and what technology to buy, and those of you in this room who are face to face with students everyday are not involved with those decision making. We have got to begin to bridge that divide.

We have got to build bridges for students as they arrive, move through and leave the university. We do a good job with arrive. We have orientation programs, first year programs, new student advising programs. We do a very good job when they leave. We help them get jobs. We help them move to graduate schools. We help them move into society. What we do not do a good job on is as they move through the university. We have got to quit talking about at-risk students and talk about the risk factors that students face. Freshman students have a totally separate set of risk factors than junior students. Second year students have totally different risk factors than fourth year students. However, we believe because they made it through the first year, they are good to go. We focus on the new students coming, in instead of recognizing that in year 2 we have got a whole different set of risk factors that we need to be working with them and in year 3 there are another set of risk factors. Academic advising is not something that we just do with new first year students. It is something we do with all students throughout their educational career, but we have to teach the students that that is what academic advising is.

I love this poster. It is poster NACADA made so of course I have to love it. We can see here “I ADVISE” but what does that mean? First thing it means is I encourage questions. When students come in to ask, do we simply talk to them or do we get them to talk to us? Are we encouraging them to ask us questions or are we just answering their questions?

I engage students. I get them involved in their educational decision making.

I support critical thought. There is much more to advising than just which course to take when. Are you encouraging students to critically think about the courses they are taking and how it is going to impact their future, their career, their lives?

I boost spirits. Many times, we have to tell students bad news, but how do we keep the spirits up? How do we keep them motivated? When a student is depressed or upset, they will come to you because they know you are the person who is going to keep them motivated and boost their spirits.

I inspire dreams. Our students come to us with dreams. They want to go places they never thought they could and many times we are the only people who encourage those dreams.

We also cultivate learning. Academic advising is not about course selection. It is about teaching and learning. It is simply a different curriculum than you might teach if you are a faculty member so that means as a campus have you defined your advising curriculum? Do you know what it is you are teaching? Do you know the learning outcomes? If you advise, then you do all of those things. If you do not, you are just a scheduler. All of you in here want to be advisors or you would not be here listening to this crazy American.

One of the things I want to encourage you to begin doing is to look at the research in the field about advising student success and make that a habit. This is an article I encourage you to read written by a former NACADA president, but it is published in Journal of General Education meaning it is not an advising journal, it is not a student success journal. Those of you who teach need to begin thinking about your own discipline journals and are there articles about advising in them and if not, how can you begin publishing those. Dr. White says the purposes of academic advising accommodate all students so that they can make reasoned demands. How many of your students make unreasonable demands of you? How many of your students make unreasonable demands of themselves? I can work full time. I can take a full load. I can never study. All right. We have to teach them that those unreasonable demands do not make sense - as they set and enact the goals of their lives. It is not our job to define student's goals, passions and degrees. It is our job to help them how to enact them and how to switch them and how to set them.

It goes on to talk about then what does advising teach students to do. First of all, it is to craft their own education, to create, to mold, to formulate. Not just to check off the boxes that I have taken the right courses.

Second, it is to understand the path they have chosen. Our students come to college not understanding why they want to major in whatever they are telling us they are majoring in. I want to be an engineer, but I have no idea there are 12 types of engineers. I want to help people, so I will be a nurse. There are other ways to help people without being nurses. I want to teach at

school because I love children. No one loves children. You love your grandchildren. You put up with your children to get grandchildren. When I was a high school principal, I never hired the candidate who said to me, "I love children" because they had never been in a night classroom before. Therefore, we need to help them understand their paths. We also need to help them use the skill and knowledge in work. Furthermore, we need to create a culture of learning around the educational experience, not a culture of compliance. Students say college is simply complying with policies and rules and graduating. They do not see it as learning and growing and changing unless we teach them that.

Who in here is different because you have an undergraduate degree? Who is different? Come on, audience participation part. Who is different because you have a degree? I am going to pick on you. How are you different because you have an undergraduate degree? You think differently?

**(Floor)** I've learned a lot of ways of thinking or learning.

He knows a new way of thinking or learning. Who in here met people who looked differently than them or acted differently from them because they went to college? Is not that something you want your students to learn? Who on here learned what it meant to be educated versus just taking courses?

We need to think about all the ways we are different because we have a college degree and want our students to be just as different when they get a college degree. Most of us did not learn until we have been out of college for a long time. Do not you wish you learned it while you are in college? That is how we can change students' lives and engage in their education. To get them to realize that getting a college degree is a passion, not just a job. Today's students think college is all about getting a job and they are never going to change unless we teach them differently. What conversations are you having with students that teach them that? If you are only talking about what courses to take and where to apply, then you are not really teaching students what it means to be educated. As faculty and academic advisors, your job is to teach them how to be educated.

What does "being learning focused" mean? Is the learning liberated or transactional? In other words, are they learning how to be free? Are they learning how to think? Are they learning how to analyze? Are they learning how to communicate with other people? Are they simply learning enough to pass the test? That is what transactional is. Transactional advising is simply telling students which courses to take. Liberating advising is transformational, it changes students' lives. It makes them question why they want to do what they want to do. It makes them realize that there is a difference between a career and a major.

Raise your hand if you are doing exactly what your undergraduate baccalaureate degree was today for a job. Raise your hand if you are doing exactly what your undergraduate degree was in. If your undergraduate degree was engineering, how many of you are engineers? If it was chemistry, how many of you are chemists? If your major is biology, how many of you are biologists? Who better than you to talk to students about there is a difference between a degree

and a major? You understand that what you got a degree in is not what you are doing today. Many of our students today have parents who got into a job and stayed into that job for 40 years. The latest data at the global level says the graduating class of 2018 will change careers six times before they are 35 years old. They need to understand the difference between a career and a major.

It is necessary to understand what the student is learning and how the student is learning. Students do not know how to learn when they first come to college. How many of you have ever had a student tell you, "I will study harder next time" and they have no idea what that looks like. When you ask to them what "harder" is look like, they just look at you. For some of them, it means "I will buy the book next time." For others of them, it means "I will go to class next time." Therefore, we have to make students understand how they learn.

Are they going to apply what they are learning as they move forward? In other words, if they do really badly on a test and they understand why, so then in the next test they will do better. Even more importantly, if they do very well on the test, do they understand why and how to apply that on the next test. When I taught English, I just had the students who did not pass essays come in to see me. It never occurred to me to have the students who made A to come in and explain to me what they did in order to make A so then we could talk about how they would apply that when they took their math test or the science test because students do not understand how they learn. As advisors, we need to ask those questions and then how are they going to use what they are learning today in the future.

I love this poster because this is something we forget. We advise, the students decide. The students want us to make decisions for them. Our job is to teach them how to make decisions and to advise them on how to make those decisions. If they make a decision that we told them to make and they are not successful, whose fault is it? It is ours. We need to teach students that it is their decision, which means we have to teach them how to make decisions. We must advise them on the best way to choose which course to take or to choose what to major in or to choose when to go to school but that is not what students want. They want their mommas and daddies to tell them what to do and for us to agree with them. You know what I say to those students? "Life is tough, then you die." We got to make a decision sometime and we will go start today.

What do students deserve? They deserve three things from good quality advising. First, they deserve informational guidance. Do we know what we know? Do we know the information? Second, they deserve intellectual mentorship. They need to know we are there to talk with them about their majors, their courses, their desires and their dreams. Third, they need us to give them and to have with them developmental relationships. Meaning that they need to know we care, we know stuff and we are available. I am a firm believer if they know we care, they will let us slide on the other two. If they know we care, they know we will find out what we do not know. If they know we care, they know that we will find a way to be accessible to them.

Now let me warn you about the generation Z students. Accessible to them means 24 hours a day, 7 days a week. What is the worst thing you can do if you get an email at midnight from a student? That is responding to it because then they will assume you will always respond to it and they will tell all their friends that. They will say, "My advisor never sleeps. Email her, she will

always write you back.” We have got to make students understand this is not the ATM version of college. They would put the ATM card in, push the ID numbers and get their degree. That is not college. Your job is to teach them what their responsibilities are which is one of the reasons we have to stop measuring academic advising by student success because you are not always going to tell students things they want to hear. You are going to tell them things that are hard and difficult like you have to get up and go to class at 8 a.m. Therefore, we have got to begin to recognize that advising is not always student satisfaction. I do not mean we do not want happy students, but we want students who have learned because we taught them in the advising relationship.

What do we need to do if we are going to demonstrate what I am talking about? If you are going to be a passionate advisor, what does that look like on a college campus? First of all, we need to develop clear definitions for what we believe student success, retention, and persistence is for our campus. Most college campuses have never had that conversation with advisors. I could go around this room today and get 60 different definitions of success. How does your campus reach success if there is no consensus about what it looks like? Therefore, we need to have those conversations and you need to recognize that you are all leaders in this room. I do not care what your title is. It does not matter whether you are dean, president, chancellor or teacher and advisor. You can turn to the person next to you and talk about what student success and come up with a consensus that, we are going to work together. We have to do that if we are going to move forward and make higher education different than it was before.

We want to develop strategic partnerships across campus. The partnerships between faculty and staff and administrators are essential because we need to all be on the same page.

We need to identify the key players on the campus and we must get them involved. The key players do not always have big titles. Sometimes the person who knows the very most in your unit is the secretary or the staff assistant. However, no one involves them in the conversation about student success but who the students keep going to - the secretary or staff assistant because they are always there. Therefore, those partnerships are clear in identifying those key players.

We need to develop a plan for leadership which has authority and a communication plan across the campus. On most college campuses worldwide, academic advisors and academic advising administrators have lots of responsibility but no authority. We need to change that and to begin to recognize what you bring to the table.

It is necessary for us to investigate study and analyze the literature and research in the field. Close your eyes. Not all of you, just her. This woman right here has written the premier advising book in Japan. Raise your hand if you have read it. I see four hands. I am so sorry, I should not have said. You can open your eyes now. The key is folks if we are not reading what it says in the research then how do we know what changes to make and it becomes an expectation that we are going to do that.

For example, this foursome right here is a new department. You are the department chair.

You just got a new title and the additional 1 million yen/year salary. Of course, I have no idea how much that is. Her job as a leader of this foursome is that she is going to find an article about student success and advising in persistence and require all four of these folks to read it. In the next department meeting, the first 20 minutes of the meeting is going to be spared for discussing that article and how we can use it. Next week, he is going to choose the article. Next week, she is going to choose the article. Next week, she is going to choose the article. What have we just done? We create a culture within this department that we are reading about student success, that we are reading about what makes students persist to graduation, that we are reading about academic advising. If we do not understand why and how students are successful, how are we ever going to get there?

We are going to take an active participatory role in the research in the field. You are going to begin writing about things you are doing well. NACADA for example has a brand new NACADA Center for Research in academic advising, the only one in the world. We are looking for new programs and new research to publish. We have a new online journal that will start in February.

How many of you have done anything in the past 5 years you are proud of with your students? Raise your hand. You better all raise your hand. Make these people raise their hands. Okay, you have then why have not you written about it? You have. Good. All right, then you get it published. Folks, it is not that hard. You know why, you know my name, mail. I will get you published. Trust me. I will get you a job. I will get you a volunteer work and published. However, you got to have a desire to change higher education. I say all the time that it is easier to move a cemetery than a college. Dead people will get up and walk faster than we will change a policy. Right? How many of you have policies on your campus that you have no idea why you have them or who created them? They were created 25 years ago by somebody who is dead or retired and you do not care, but we are still following them. We can change that if we really take time to look at what our campuses are doing and make learning about student success a priority and writing about student success a priority and sharing about student success a priority.

Go to the NACADA website. You will find over 5,000 articles about student success. Choose one a week and send it to your whole department. The first week everybody will delete it. The second week a few people will open it. The third week a couple of people will read it. The fifth week somebody will discuss it and all of a sudden you change the culture. Do not tell me I do not have the power to do it. You do, and you would not be here if you did not believe it.

Make the discussion of our discipline, advising, skills, and expectation - not a luxury. I am going to be egotistical enough to say this is a luxury. You can't take this afternoon off to come to listen. The advising salon is going to be held next February 10th that is a luxury. We want to make an expectation that everybody is reading about the field, studying the field, talking and advising all the time, not just once or twice a year.

We need to begin to utilize data to analyze our issues more carefully. What data do we know about our students? Who are your students? What populations need the most help? What populations need the least help? What data do you have that clearly defines that? Most campuses ask very little about their students and we need to be asking more. We need to be looking at the risk factors that affect students and then we need to be truly looking at those



institutional policies and procedures that are positively affecting student success and negatively affecting the student success. If there is a department or program about your campus that is actively and positively affecting the success of students, why aren't we replicating that across the campus. Why are only one group of students getting that? And then if there are things that we know negatively affects success why are we still doing it.

I will ask you to raise your hands because I know you will. NACADA that you have heard a little bit, if you can name or think of something that happens on your campus that is negatively affecting students every day. I saw a lot of nods. They were slight, but I solve it. Why are you still doing them? We can make change and we've got to begin to take that as a point. We need to be actively involved. Academic advising needs to be actively involved with understanding student's academic pathways and careers. When a change in a curriculum occurs, we need to know about it. We have all been in a situation where the student has come in to us and we said, "You need to do X, Y, Z" but the student says, "Oh, no. That policy changed." The students know it before you do. We have got to become actively involved with knowing how programs are changing and how programs are developing. You have already begun this process at Chiba University. If you happen not to be at Chiba University and have not begun this, you have got to and that is we have got to develop student learning outcomes for academic advising.

What do students learn when they spend time with you? Do they only learn what course to take next? Do they learn about the value of higher education and life? Something happens there between teaching and learning. We must develop them, and we must understand the different learning outcomes for every year students in campus. The things that seniors need to know that freshmen never need to know. What do we do at orientation? We tell them everything they ever need to know for the rest of their lives because we are afraid that we will never see them again. So, divided.

I want to end with the final poster for the day. Can you truly say this about your students? When a student enters your office, does that student feel respected? How do you know that? What evidence do you have? What data do you have? Just because you think they feel respected do you know they have been? Students feel they are valued.

Do you value them as a human being or they are simply another number on your campus? Do you have students who could disappear from your university and nobody would ever notice? If that is the case, students do not know they are valued. Students who are valued know they will be missed.

Do students feel heard? There is a difference between listening and hearing. Body language is a part of that. Are you listening or watching your email pop up every time the student is talking? Do you have your phone turned off in front of your desk, so texts are not coming in while you are talking to the student? You say, "Charlie, I am not looking at those texts." You might think students do not know that. To that student, the fact that they are watching messages come up on your phone makes them assume you are not listening to them. How simple is it to just turn it off on the desk? How simple is it just to turn your computer screen off? Those are simple things you can do, but all students know they are heard.

And then last, do students know they matter? Do your students know they matter at your university? If I walk to college campus today and I walked up to 20 students and I said, “Do you matter at Chiba University” or wherever you are from? How many would say, “Yes, I matter.” How many would say, “No, I do not matter.” How many would say, “What are you talking about?” The ‘what are you talking about’ students are the ones we need to be worried about because the ones that know they matter will survive. You probably cannot save the small percentage of students who do not think they matter, but the huge number of students who do not know what I am talking about or the ones who do not ever feel like are ever going to be successful and we can change that.

I was on a campus in the Netherlands and I had an afternoon off, put on a pair of jeans and a sweat shirt and walked across campus. Students are nice to old people. They all thought I had dementia. They just thought I was an old man who was lost. I said to every student, “Why are you here? Why did you choose to come to X university?” and one hundred percent of them said the same thing. They said, “Because the minute I stepped on this campus, I felt like I was home.” That did not happen overnight. That did not happen because of one person. That did not happen because of one program. That happened because the culture of that campus changed so that the students all knew they mattered and felt at home.

Do you want your students to stay? Do you want your students to feel at home? You can make that happen because you care, because you are intelligent and because you are academic advisors. Thank you for letting me be a part of today’s meeting. Thank you so much.

**チャーリー・ナット (Dr. Charlie Nutt)**

NACADA (National Academic Advising Association) 専務理事。  
Coastal Georgia Community Collegeにおいて英語学の准教授、オリエンテーション・アドバイジング部門のディレクター、副学長 (Student Development Services) を歴任。2002年にNACADA事務局のアソシエイト・ディレクター及びカンザス州立大学教育学部准教授に着任後、2007年より現職。教育学博士 (Georgia Southern University, Educational Leadership in Higher Education)。現在は、NACADA専務理事として、事務局業務の取り纏めを行うとともに、専門職能開発に関わる業務及び渉外業務を担当。

**竹内 比呂也 (たけうち ひろや)**

千葉大学副学長、附属図書館長、アカデミック・リンク・センター長、人文科学研究院教授。図書館情報学専攻。著書に『図書館サービス論 (共著)』『図書館はまちの真ん中 (共著)』『変わりゆく大学図書館 (共編著)』などがある。

**我妻 鉄也 (わがつま てつや)**

千葉大学アカデミック・リンク・センター特任助教。2018年から現職。専門は比較教育学、高等教育論。著書に『トランスナショナル高等教育の国際比較－留学概念の転換 (共著)』、『新版 オーストラリア・ニュージーランドの教育－グローバル社会を生き抜く力の育成に向けて (共著)』などがある。

ALPS ブックレット シリーズ vol.4

千葉大学ALPSプログラム 第4回シンポジウム

**米国高等教育におけるアカデミック・アドバイジング  
－アカデミック・アドバイザー養成と専門職団体 (NACADA) の役割－**

平成31年3月31日発行

発行者：千葉大学アカデミック・リンク・センター  
(教育関係共同利用拠点 (教育・学修支援専門職を養成する実践的SDプログラムの開発・運営拠点))

〒263-8522 千葉県千葉市稲毛区弥生町1-33

TEL : 043-290-2243

MAIL : alps-info@chiba-u.jp

表紙デザイン：西原 朝子 / 印刷：株式会社 正文社

